

Oracle® Database

Companion CD インストレーション・ガイド

10g リリース 1 (10.1) for UNIX Systems

部品番号 : B13717-03

2004 年 11 月

Oracle Database Companion CD インストール・ガイド, 10g リリース 1 (10.1) for UNIX Systems

部品番号 : B13717-03

原本名 : Oracle Database Companion CD Installation Guide, 10g Release 1 (10.1) for UNIX Systems: AIX-Based Systems, hp HP-UX, hp Tru64 UNIX, Linux, and Solaris Operating System

原本部品番号 : B10886-06

Copyright © 1996, 2004 Oracle Corporation. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかえる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることが使用者の責任となります。万が一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

はじめに	v
------------	---

1 インストールの概要

インストールの概要	1-2
インストール・プロセス	1-3
「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプでインストールされる製品	1-3
Oracle Database Examples	1-4
必須製品	1-4
JPublisher	1-4
Legato Single Server Version	1-6
ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ	1-7
Oracle Text のナレッジ・ベース	1-7
「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプでインストールされる製品	1-8
Oracle HTTP Server	1-8
このリリースとその他の Oracle HTTP Server リリースの違い	1-9
Oracle HTTP Server のインストール先	1-10
Oracle HTML DB	1-10
Oracle HTML DB のインストール先	1-10

2 既存の Oracle ホームにインストールする前の作業

Oracle Database 10g Products のインストール前の作業	2-2
Oracle Database 10g インストールのチェック	2-2
Oracle Database 10g の Oracle ホーム・ディレクトリの識別	2-2
ディスク領域要件のチェック	2-2

Oracle HTML DB のインストール前の作業	2-3
適切な Oracle HTTP Server インストールの識別	2-3
ディスク領域要件のチェック	2-3
Oracle Database インストールのチェック	2-4
Oracle XML DB のチェック	2-4
データベース情報の識別	2-4

3 新規の Oracle ホームにインストールする前の作業

インストールの考慮事項	3-2
Oracle HTTP Server のインストール前の作業	3-3
root としてのシステムへのログイン	3-3
ハードウェア要件の確認	3-4
ソフトウェア要件の確認	3-7
AIX でのソフトウェア要件の確認	3-7
HP-UX でのソフトウェア要件の確認	3-9
Linux でのソフトウェア要件の確認	3-13
Solaris でのソフトウェア要件の確認	3-19
Tru64 UNIX でのソフトウェア要件の確認	3-23
必要な UNIX グループおよびユーザーの作成	3-25
Oracle インベントリ・グループの作成	3-26
Oracle ソフトウェア所有者ユーザーの作成	3-27
必須ソフトウェア・ディレクトリの識別	3-30
Oracle ベース・ディレクトリの識別または作成	3-32
oracle ユーザーの環境の構成	3-34
Oracle HTML DB のインストール前の作業	3-37
Oracle Database インストールのチェック	3-37
Oracle XML DB のチェック	3-37
データベース情報の識別	3-37

4 ソフトウェアのインストール

概要	4-2
zSeries Linux でのソフトウェアのインストール	4-2
Oracle Database 10g Products のインストール	4-3
既存の Oracle ホームへの Oracle HTML DB のインストール	4-4
新規の Oracle ホームへの Oracle Database 10g Companion Products のインストール	4-6

5 インストール後の作業

Oracle HTTP Server のインストール後の作業	5-2
root.sh スクリプトのバックアップ作成	5-2
以前のリリースの Oracle HTTP Server からの移行	5-2
httpd.conf ファイルの移行	5-3
mod_plsql で使用されるデータベース・アクセス記述子の移行	5-11
Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動	5-12
Oracle HTML DB のインストール後の作業	5-14
HP-UX Itanium および Linux Itanium の場合のみ : Oracle HTML DB の DAD の構成	5-14
Oracle HTTP Server の再起動	5-15
インストールの検証	5-15
Legato Single Server Version のインストール後の作業	5-16

6 Oracle ソフトウェアの削除

Oracle ソフトウェア・ファイルの削除	6-2
Oracle HTML DB データベース・オブジェクトの削除	6-3

A ディスクのマウント

AIX でのディスクのマウント	A-2
HP-UX でのディスクのマウント	A-3
Linux でのディスクのマウント	A-4
Solaris でのディスクのマウント	A-5
Tru64 UNIX でのディスクのマウント	A-6

B トラブルシューティング

要件の確認	B-2
X Window の表示エラー	B-2
インストール・エラーが発生した場合の操作	B-3
インストール・セッションのログの確認	B-4
Configuration Assistant のトラブルシューティング	B-5
Configuration Assistant の障害	B-5
致命的エラー	B-5

インストール失敗後のクリーン・アップ	B-6
HTML DB イメージ・ディレクトリの別名	B-6

索引

はじめに

このマニュアルでは、Oracle Database 10g Companion CD から入手可能な製品をインストールして構成する方法について説明します。

対象読者

このマニュアルは、Oracle Database 10g Companion CD から入手可能な製品のインストール担当者を対象としています。

用語

このマニュアルでは、UNIX オペレーティング・システムの名前を次のように短縮して使用しています。

オペレーティング・システム	短縮名
AIX-Based Systems	AIX
HP-UX PA-RISC (64-bit) HP-UX Itanium	HP-UX 注意: 特定のアーキテクチャにおける HP-UX の情報の違いについては、本文中に記載されています。
HP Tru64 UNIX	Tru64 UNIX
Linux x86 Linux Itanium IBM zSeries Based Linux	Linux 注意: 特定のアーキテクチャにおける Linux の情報の違いについては、本文中に記載されています。
Solaris Operating System (SPARC) Solaris Operating System (x86)	Solaris 注意: 特定のアーキテクチャにおける Solaris の情報の違いについては、本文中に記載されています。

表記規則

このマニュアルでは、次の表記規則を使用しています。

規則	説明
固定幅フォント	固定幅フォントは、UNIX コマンド、ディレクトリ名、ユーザー名、パス名およびファイル名を表します。
イタリック体	イタリック体は、ファイル名の変数部分など、変数を表します。
大文字	大文字は、Structured Query Language (SQL) の予約語、初期化パラメータおよび環境変数を表します。

コマンド構文

UNIX のコマンド構文は、固定幅フォントで表示されます。ドル記号 (\$)、シャープ記号 (#) またはパーセント記号 (%) は、UNIX コマンド・プロンプトです。これらの文字は、コマンドの一部として入力しないでください。

規則	説明
バックスラッシュ \	バックスラッシュは、長すぎて 1 行に収まらないコマンドの継続文字を表します。この種の行は、このマニュアルで記載しているとおりに入力する (バックスラッシュを付ける) か、バックスラッシュを付けずに 1 行で入力します。 <code>dd if=/dev/rdisk/c0t1d0s6 of=/dev/rst0 bs=10b \</code> <code>count=10000</code>
中カッコ {}	中カッコは、必須入力項目を表します。 <code>.DEFINE {macro1}</code>
大カッコ []	大カッコは、オプションの入力項目を表します。 <code>cvtcrt termname [outfile]</code>
省略記号 ...	省略記号は、同じ項目を任意の数だけ繰り返すことを表します。 <code>CHKVAL fieldname value1 value2 ... valueN</code>
イタリック体	イタリック体は、変数を表します。変数には値を代入します。 <code>library_name</code>
縦線	縦線は、中カッコまたは大カッコ内の選択肢を区切ります。 <code>SIZE filesize [K M]</code>

ドキュメントへのアクセス

Oracle Database 10g Companion CD のドキュメントには、プラットフォーム固有のドキュメントと汎用の製品ドキュメントがあります。

プラットフォーム固有のドキュメント

プラットフォーム固有のドキュメントには、特定のプラットフォームでの Oracle 製品のインストールと使用に関する情報が記載されています。この製品のプラットフォーム固有のドキュメントは、製品ディスクに Adobe Portable Document (PDF) 形式と HTML 形式で収録されています。ディスクに収録されたプラットフォーム固有のドキュメントにアクセスする手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを使用してディスクの最上位ディレクトリにある `welcome.htm` ファイルを開きます。
2. 「Documentation」タブを選択します。

印刷されたマニュアルが必要な場合は、PDF ファイルを開いて印刷してください。

製品のドキュメント

製品のドキュメントには、すべてのプラットフォームでの Oracle 製品の構成、使用または管理に関する情報が記載されています。Oracle Database 10g 製品の製品ドキュメントは、次の場所から HTML 形式と PDF 形式で入手できます。

- Oracle Database 10g Documentation Library CD-ROM

CD-ROM からドキュメントにアクセスするには、Web ブラウザを使用してディスクの最上位ディレクトリにある `index.htm` ファイルを表示します。

- Oracle Technology Network Japan (OTN-J) の Web サイト

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

関連ドキュメント

Oracle Database 10g 製品のプラットフォーム固有のドキュメントには、次のマニュアルが含まれます。

- Oracle Database:
 - 『Oracle Database リリース・ノート』（プラットフォーム固有）
 - 『Oracle Database クイック・インストール・ガイド』（プラットフォーム固有）
 - 『Oracle Database インストール・ガイド for UNIX Systems』
 - 『Oracle Real Application Clusters インストールおよび構成』
 - 『Oracle Database 管理者リファレンス for UNIX Systems』
 - 『Oracle Transparent Gateway for DRDA Installation and User's Guide for UNIX』
- Oracle Client:
 - 『Oracle Database Client クイック・インストール・ガイド』（プラットフォーム固有）
 - 『Oracle Database Client インストール・ガイド for UNIX Systems』
- Oracle Database 10g Companion CD:
 - 『Oracle Database Companion CD インストール・ガイド for UNIX Systems』
 - 『Oracle Database Companion CD クイック・インストール・ガイド』（プラットフォーム固有）

このマニュアルのリリース時以降に判明した重要情報については、プラットフォームの『Oracle Database リリース・ノート』を参照してください。Oracle Database 10g のリリース・ノートは、定期的に更新されます。最新のバージョンは、OTN-J から入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

サード・パーティ・ソフトウェア情報

このプログラムには、HP 社のサード・パーティ・ソフトウェアが含まれています。Oracle プログラム（HP 社のソフトウェアを含む）を使用する権利は、この製品に付随する Oracle プログラム・ライセンスによって許諾されます。これと異なる規定が Oracle プログラム・ライセンス内にある場合でも、HP 社のソフトウェアは現状のままであり、この規定によっていかなる種類の知的財産権保護、保証またはサポートもオラクル社または HP 社から提供されることはありません。

このプログラムには、IBM 社のサード・パーティ・ソフトウェアが含まれています。Oracle プログラム（IBM 社のソフトウェアを含む）を使用する権利は、この製品に付随する Oracle プログラム・ライセンスによって許諾されます。

これと異なる規定が Oracle プログラム・ライセンス内にある場合でも、IBM 社のソフトウェアは現状のままであり、この規定によっていかなる種類の知的財産権保護、保証またはサポートもオラクル社または IBM 社から提供されることはありません。

インストールの概要

この章では、Oracle Database 10g Companion CD からインストールできる製品の概要と、各製品のインストール前に考慮する必要がある問題について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- インストールの概要
- 「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプでインストールされる製品
- 「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプでインストールされる製品

インストールの概要

この項では、Oracle Database 10g Companion CD から選択可能なインストール・タイプと、インストール・プロセスの概要について説明します。

インストール・タイプ

Oracle Database 10g Companion CD には、次の 2 つのインストール・タイプが含まれています。

- Oracle Database 10g Products
- Oracle Database 10g Companion Products

Oracle Database 10g Products

「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプには次の製品が含まれています。これらは、既存の Oracle Database 10g の Oracle ホームにインストールする必要があります。

- [Oracle Database Examples](#)
- [JPublisher](#)
- [Legato Single Server Version](#)
- [ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ](#)
- [Oracle Text のナレッジ・ベース](#)

Oracle Database 10g Companion Products

「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプには、次の製品が含まれています。

- [Oracle HTTP Server](#)
- [Oracle HTML DB](#)

Oracle HTTP Server は新規の Oracle ホームにインストールする必要があります。Oracle HTML DB は、Oracle HTTP Server の Oracle ホームにインストールします。Companion CD からインストールした Oracle HTTP Server を含む既存の Oracle ホームにインストールするか、または両方の製品を同時にインストールするように選択できます。

インストール・プロセス

どちらの製品を選択したかにかかわらず、インストール・プロセスは次の 4 段階で構成されます。

1. **インストールの計画**: この章では、インストールできる製品と、ソフトウェアのインストール前に知っておく必要のある情報について説明します。
2. **インストール前の作業の完了**: 次の各章では、ソフトウェアのインストール先に応じて、ソフトウェアのインストール前に完了しておく必要のある事前作業について説明します。
 - [第 2 章「既存の Oracle ホームにインストールする前の作業」](#)
 - [第 3 章「新規の Oracle ホームにインストールする前の作業」](#)
3. **ソフトウェアのインストール**: [第 4 章](#)では、Oracle Universal Installer を使用してソフトウェアをインストールする方法について説明します。
4. **インストール後の作業の完了**: [第 5 章](#)では、推奨および必須のインストール後の作業について説明します。

「Oracle Database 10g Products」 インストール・タイプでインストールされる製品

次の項では、「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプを選択した場合にインストールされる製品について説明します。これらの製品は、既存の Oracle Database 10g の Oracle ホームにインストールする必要があります。

- [Oracle Database Examples](#)
- [JPublisher](#)
- [Legato Single Server Version](#)
- [ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ](#)
- [Oracle Text のナレッジ・ベース](#)

Oracle Database Examples

Oracle Database Examples には、Oracle Database 10g の製品、オプションおよび機能の習得に使用できる多様な例と製品デモが含まれています。これらの例の多くは、Oracle Database 10g データベースにオプションでインストールできるサンプル・スキーマを処理するように設計されています。Oracle 製品固有のドキュメント・ライブラリにある多数のドキュメントは、Oracle Database Examples で提供されるサンプル・プログラムおよびスクリプトを使用しています。

必須製品

一部の例を使用するためには、Oracle データベースにサンプル・スキーマもインストールする必要があります。データベースの作成時にサンプル・スキーマを組み込むかどうかは、Oracle Database 10g をインストールするとき、または Database Configuration Assistant (DBCA) を使用して新規データベースを作成するときに選択できます。また、サンプル・スキーマを既存のデータベースに手動でインストールすることもできます。サンプル・スキーマのインストールに必要なスクリプトは、「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプでインストールされます。

関連項目： サンプル・スキーマを既存のデータベースに手動でインストールする方法については、『Oracle Database サンプル・スキーマ』を参照してください。

JPublisher

JPublisher は Java ユーティリティであり、Java プログラム内で次のユーザー定義データベース・エンティティを表す Java クラスを生成します。

- SQL オブジェクト型
- オブジェクト参照型 (REF 型)
- SQL コレクション型 (VARRAY 型または NESTED TABLE 型)
- PL/SQL パッケージ
- サーバー・サイド Java クラス
- SQL 問合せおよび DML 文

JPublisher を使用すると、SQL オブジェクト型、オブジェクト参照型およびコレクション型 (VARRAY または NESTED TABLE) から Java クラスへのマッピングを強い型指定で指定し、カスタマイズできます。

また、JPublisher で PL/SQL パッケージ用のクラスも生成できます。これらのクラスは、PL/SQL パッケージ内でストアド・プロシージャを起動するためのラッパー・メソッドを持ちます。

さらに、JPublisher により Java から PL/SQL のみの型へのアクセスが単純化されます。PL/SQL の型と SQL の型の間で事前定義済マッピングまたはユーザー定義マッピングを使用したり、これらの型の間で PL/SQL 変換ファンクションを使用できます。これらの型が適切に対応していれば、JPublisher では必要な Java および PL/SQL コードがすべて自動的に生成されます。

SQL または PL/SQL エンティティを Java に公開するのと同じ方法で、サーバー・サイド Java クラスをクライアント・サイド Java クラスに公開できます。これにより、アプリケーションからデータベースの Java クラスを直接コールできます。

JPublisher を使用すると、生成された Java クラスを Web サービスとして公開できます。たとえば、SQL または PL/SQL エンティティやサーバー・サイド Java エンティティを公開できます。

JPublisher は、生成されるほとんどの Java クラスで SQLJ コードを使用するため、Oracle SQLJ Translator および Oracle SQLJ Runtime が組み込まれています。Oracle SQLJ は、Java プログラムに SQL 文を埋め込むための標準的な方法です。

Oracle SQLJ Translator

JPublisher は生成されるクラスで SQLJ コードを使用するため、必要に応じて、コードの生成プロセスで Oracle SQLJ Translator を自動的に起動します。Oracle SQLJ Translator は、埋込み SQL 文を JDBC コールに変換します。

Oracle SQLJ Runtime

Oracle SQLJ Runtime はプログラムの実行中に使用され、JPublisher によって生成されたほとんどのクラスを実行します。SQLJ Runtime は、JDBC ドライバ上で動作する、Pure Java コードの Thin レイヤーです。SQLJ Runtime は、SQL 操作に関する情報を読み取り、JDBC ドライバに指示を伝達する中間プログラムとして機能します。

関連項目： JPublisher の詳細は、『Oracle Database JPublisher ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Legato Single Server Version

注意： Legato Single Server Version は、Solaris x86 および zSeries Linux ではサポートされません。

Legato Single Server Version (LSSV) は、Legato Systems 社が開発したバックアップおよびリカバリ・アプリケーションであり、Oracle 製品向けの Legato NetWorker および Legato NetWorker Module のサブセットです。LSSV を使用すると、単一サーバー上でのみ Oracle データをバックアップおよびリストアできます。また、ファイル・システム、Automatic Storage Management ディスク・グループまたは RAW デバイスに格納されている Oracle データのオンライン・バックアップまたはオフライン・バックアップを実行できます。

LSSV ソフトウェアには、メディア管理レイヤーが含まれています。Oracle Recovery Manager (RMAN) では、データベースのバックアップおよびリストアにテープ記憶域を使用するときに、このレイヤーが必要になります。LSSV はバックアップ・スケジュールを管理し、Oracle Recovery Manager (RMAN) と通信して、Oracle データをテープにコピーします。

Legato Single Server Version は、Oracle データ記憶域を管理するために Oracle Database とともに機能するので、Legato Single Server Version は Oracle Database と同じシステムにインストールする必要があります。Legato Single Server Version および Oracle Database ソフトウェア・コンポーネントは、Oracle Database データに記憶域管理ソリューションを提供します。

Legato Single Server Version 管理プログラムには、Legato Single Server Version 構成を管理するためのグラフィカル・ユーザー・インタフェースがあります。管理プログラムは、Oracle Server システムに Legato Single Server Version をインストールするときにインストールされます。

Legato Single Server Version を完全にインストールして構成するには、次の作業を完了する必要があります。

1. Legato Storage Manager または Legato Networker がインストールされている場合は削除します。
2. 必要なソフトウェアおよびハードウェアが使用可能であることを確認します。
3. Legato Single Server Version を Oracle Database 10g と同じ Oracle ホーム・ディレクトリにインストールします。
4. インストール後の手順を完了します。

関連項目： Oracle Database を Legato Single Server Version のクライアントとして構成する方法、Legato Storage Manager をアップグレードまたは削除する方法、および Legato Single Server Version を削除する方法は、『Legato Single Server Version Installation Guide, Release 6.1』を参照してください。

Legato 社のドキュメントは、Legato 社の次の Web サイトから入手できます。

<http://www.legato.com/LSSV>

ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ

「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプは、JAccelerator および Oracle *interMedia* Image Accelerator をインストールします。これには、Oracle JVM および Oracle *interMedia* 用のネイティブ・コンパイル Java ライブラリ (NCOMP) が含まれています。プラットフォーム上でこの 2 つの製品のパフォーマンスを改善するには、これらのライブラリが必要です。

Oracle Text のナレッジ・ベース

Oracle Text のナレッジ・ベースは、テーマの索引付け、ABOUT 問合せ、およびドキュメント・サービスでのテーマの抽出に使用される概念の階層ツリーです。「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプは、2 つの Oracle Text ナレッジ・ベース（英語とフランス語）をインストールします。提供されるナレッジ・ベースは、要件に応じて拡張できます。あるいは、英語とフランス語以外の言語で自分自身のナレッジ・ベースを作成できます。ナレッジ・ベースの作成および拡張の詳細は、『Oracle Text リファレンス』を参照してください。

「Oracle Database 10g Companion Products」 インストール・タイプでインストールされる製品

次の項では、「Oracle Database 10g Companion Products」 インストール・タイプを選択した場合にインストールできる製品について説明します。

- [Oracle HTTP Server](#)
- [Oracle HTML DB](#)

Oracle HTTP Server

Oracle HTTP Server は、Apache HTTP Server をベースとする Web サーバーです。「Oracle Database 10g Companion Products」 インストール・タイプを使用して、Oracle HTTP Server を新規の Oracle ホームにインストールします。このスタンドアロン・リリースの Oracle HTTP Server には、次の機能が用意されています。

注意： OPMN は、HP-UX Itanium システム、Linux Itanium システム、Solaris x86 システムおよび zSeries Linux システムでは提供されません。

mod_osso は、HP-UX Itanium システムまたは Linux Itanium システムでは提供されません。

- Web ページの提供に使用できる堅牢で信頼性の高い Web サーバー
- mod_perl および mod_fastcgi を使用した Perl および Fast CGI スクリプトのサポート
- mod_plsql を使用した PL/SQL アプリケーションのサポート
- Oracle Process Manager and Notification サーバー（OPMN）の使用による高可用性
OPMN は Oracle HTTP Server プロセスを監視し、障害の発生時に再起動します。
- Secure Sockets Layer（SSL）を使用したセキュアなトランザクションのサポート
- mod_osso を使用したシングル・サインオン機能
シングル・サインオン機能を有効化するには、Oracle HTTP Server とともに Oracle Internet Directory を使用する必要があります。Oracle Internet Directory は、Oracle Application Server 10g の一部として使用可能です。
- オラクル社が提供するモジュールのみでなく多数の標準 Apache モジュール

このリリースとその他の Oracle HTTP Server リリースの違い

スタンドアロン・バージョンの Oracle HTTP Server は、他のリリースの Oracle ソフトウェアに付属するバージョンと、次の点で異なっています。

注意： HP-UX Itanium および Linux Itanium では、Oracle HTTP Server はリリース 9.2.0 です。これは、Oracle9i リリース 2 (9.2) で提供されるリリースと同じです。

Solaris x86 および zSeries Linux では、Oracle HTTP Server はリリース 10.1.2 です。

- Oracle9i リリース 2 以下および Oracle9iAS リリース 1 との相違
 - このリリースの Oracle HTTP Server には、Apache Jserv は付属していません。このリリースでの使用はサポートされません。
 - Apache JServ がサポートされないため、デフォルト構成では `mod_oprocmgr` モジュールはロードされません。
 - このリリースでは、`mod_ssl` はオラクル社が開発した `mod_ossll` に置き換えられています。

SSL 証明書を `mod_ossll` に必要な書式に移行する方法の詳細は、[第 5 章](#)を参照してください。
 - AIX、HP-UX PA-RISC、Linux x86、Solaris SPARC および Tru64 UNIX では、`apachectl` ユーティリティは、Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動について、サポートされません。

これらのプラットフォームでは、Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動に `opmnctl` ユーティリティを使用します。`opmnctl` ユーティリティの使用方法の詳細は、[第 5 章](#)を参照してください。
- Oracle9iAS リリース 2 以上との相違
 - Oracle9iAS または Oracle Application Server 10g クラスタには、スタンドアロン・リリースの Oracle HTTP Server は構成できません。

このため、このリリースの Oracle HTTP Server に関連したプロセスの起動、停止または再起動には、`dcmdctl` ユーティリティを使用できません。
 - このリリースの Oracle HTTP Server の管理には、Oracle Enterprise Manager の Application Server Control を使用できません。

Oracle HTTP Server のインストール先

Oracle HTTP Server は新規の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする必要があります。既存の Oracle ホーム・ディレクトリにはインストールしないでください。Oracle HTTP Server は、インストールごとに別の Oracle ホーム・ディレクトリを使用させることにより、同じシステム上に複数をインストールできます。

Oracle HTML DB

Oracle HTML DB は、プログラマでなくてもデータベース集中型の Web アプリケーションを作成できるようにする、管理された開発環境です。開発者にとっては、デスクトップ・データベースの生産性と Oracle データベースのセキュリティ、信頼性およびパフォーマンスが得られます。どのような IT 企業でも、Oracle 開発スキルを持った社員がいない部門向けに Oracle HTML DB 環境を管理できます。

Oracle HTML DB のインストール先

Oracle HTML DB は、Oracle HTTP Server とともに新規の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールするように選択できます。または、Companion CD からインストールした Oracle HTTP Server を含む既存の Oracle ホームにこの製品をインストールすることもできます。Oracle HTML DB は、他の Oracle HTTP Server の Oracle ホームにはインストールしないでください。

既存の Oracle ホームにインストールする前の作業

この章では、ソフトウェアを既存の Oracle ホームにインストールする前に完了しておく必要のある作業について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- [Oracle Database 10g Products のインストール前の作業](#)
- [Oracle HTML DB のインストール前の作業](#)

Oracle Database 10g Products のインストール前の作業

「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプを選択すると、インストーラにより、このインストール・タイプに含まれるすべての製品がインストールされます。Oracle Database 10g Products をインストールする前に、システムが次の項で説明する要件を満たしていることを確認してください。

Oracle Database 10g インストールのチェック

このインストール・タイプを使用する前に、システムに Oracle Database 10g の Oracle ホームがあることを確認します。存在しない場合は、「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプの製品をインストールする前に、Oracle Database 10g をインストールする必要があります。

関連項目： Oracle Database 10g のインストール方法は、『Oracle Database インストレーション・ガイド for UNIX Systems』を参照してください。

Oracle Database 10g の Oracle ホーム・ディレクトリの識別

必要な場合は、Oracle Database 10g インストールで使用されている Oracle ホーム・ディレクトリを識別します。Oracle ホーム・ディレクトリのパスが不明な場合は、次のように入力して oratab ファイルを調べてください。

- Solaris の場合
more /var/opt/oracle/oratab
- 他のオペレーティング・システムの場合
more /etc/oratab

ディスク領域要件のチェック

Oracle ホーム・ディレクトリを含むファイル・システムに 1 GB 以上の空きディスク領域があることを確認します。

Oracle ホーム・ディレクトリに十分な領域があるかどうかをチェックするには、次のいずれかのコマンドを入力します。

- HP-UX の場合
bdf oracle_home_path
- 他のオペレーティング・システムの場合
df -k oracle_home_path

Oracle HTML DB のインストール前の作業

注意： この項では、Oracle HTTP Server が含まれている既存の Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle HTML DB をインストールする場合について、インストール前に完了しておく作業を説明します。この要件を満たす Oracle ホーム・ディレクトリについて、次の項を参照してください。また、Oracle HTML DB は、Oracle HTTP Server とともに新規の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールすることもできます。

「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプの選択では、Companion CD からインストールした Oracle HTTP Server を含む既存の Oracle ホームに Oracle HTML DB をインストールするように選択できます。Oracle HTML DB をインストールする前に、システムが次の項で説明する要件を満たしていることを確認してください。

適切な Oracle HTTP Server インストールの識別

Oracle HTML DB をインストールする前に、Companion CD からインストールした Oracle HTTP Server を含む Oracle ホーム・ディレクトリがシステムに存在するかどうかを確認します。存在しない場合は、Oracle HTML DB とともに Oracle HTTP Server をインストールする必要があります。

注意： Companion CD からインストールした Oracle HTTP Server を含む Oracle ホーム・ディレクトリが存在しない場合は、Oracle HTML DB のインストール時に Oracle HTTP Server をインストールする必要があります。Oracle HTTP Server のインストール前の作業については、[第3章](#)を参照してください。

ディスク領域要件のチェック

Oracle ホーム・ディレクトリを含むファイル・システムに 350 MB 以上の空きディスク領域があることを確認します。

Oracle ホーム・ディレクトリに十分な領域があるかどうかをチェックするには、次のいずれかのコマンドを入力します。

- HP-UX の場合

```
# bdf /httpserver_oracle_home_path
```
- 他のオペレーティング・システムの場合

```
# df -k /httpserver_oracle_home_path
```

Oracle Database インストールのチェック

Oracle HTML DB をインストールする前に、Oracle HTML DB とともに使用する Oracle データベースを識別します。データベースは、Oracle9i リリース 9.2.0.3 以上である必要があります。インストールする Oracle HTML DB と異なるシステム上にあるデータベースでも可能です。

Oracle XML DB のチェック

使用するデータベースには Oracle XML DB をインストールする必要があります。

インストール時に作成されたか Database Configuration Assistant (DBCA) により作成された事前構成済データベースを使用する場合、Oracle XML DB のインストールと構成はすでに完了しています。Oracle XML DB を既存のデータベースに手動で追加する方法は、『Oracle XML DB 開発者ガイド』を参照してください。

データベース情報の識別

インストール時に、次のデータベース情報を指定する必要があります。

- データベース・システムのホスト名
- Oracle Net Listener のポート番号
- データベースのサービス名
- SYS ユーザーのパスワード

インストールを開始する前に、この情報を確認してください。

「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプのインストール手順については、[第 4 章](#)を参照してください。

新規の Oracle ホームにインストールする前の作業

この章では、Oracle Universal Installer を起動して Oracle 製品を新規 Oracle ホームにインストールする前に完了しておく必要のある作業について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- [インストールの考慮事項](#)
- [Oracle HTTP Server のインストール前の作業](#)
- [Oracle HTML DB のインストール前の作業](#)

インストールの考慮事項

インストールを開始する前に、次のガイドラインを参照してください。

ハードウェアおよびソフトウェアの動作保証

このマニュアルに記載されているプラットフォーム固有のハードウェア要件とソフトウェア要件は、このマニュアルの発行時点での最新情報です。ただし、このマニュアルの発行後にプラットフォームおよびオペレーティング・システム・ソフトウェアの新バージョンが動作保証されている場合があるため、オラクル製品 主なシステム要件 で、動作保証されているハードウェア・プラットフォームとオペレーティング・システムのバージョンの最新リストを確認してください。オラクル製品 主なシステム要件 は、次の URL でアクセスできます。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

Oracle Database 10g Companion Products のインストール

「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプに含まれる製品をインストールする前に、インストールする製品に応じて、次の項で説明する作業を完了してください。

- [Oracle HTTP Server のインストール前の作業](#)
- [Oracle HTML DB のインストール前の作業](#)

注意： Oracle HTML DB を新規 Oracle ホームにインストールする場合は、同時に Oracle HTTP Server をインストールする必要があります。

関連項目： Oracle HTML DB を既存の Oracle HTTP Server の Oracle ホームにインストールする場合は、[第 2 章「既存の Oracle ホームにインストールする前の作業」](#)を参照してください。

Oracle HTTP Server のインストール前の作業

Oracle HTTP Server をインストールする前に、次の項で説明するタスクを実行します。

root としてのシステムへのログイン

Oracle ソフトウェアをインストールする前に、root ユーザーとして複数の作業を完了しておく必要があります。root ユーザーとしてログインするには、次の手順のどちらか一方を実行します。

注意： サイレント・インストールを実行する場合を除き、X Window System ワークステーション、X 端末、または X サーバー・ソフトウェアがインストールされている PC またはその他のシステムからソフトウェアをインストールする必要があります。

- X Window System ワークステーションまたは X 端末からソフトウェアをインストールする手順は、次のとおりです。

1. X 端末 (xterm) などのローカル・ターミナル・セッションを開始します。
2. ソフトウェアをローカル・システムにインストールしない場合は、次のコマンドを入力して、ローカル X サーバー上にリモート・ホストの X アプリケーションを表示します。

```
$ xhost +
```

3. ソフトウェアをローカル・システムにインストールしない場合は、ssh、rlogin または telnet コマンドを使用して、ソフトウェアをインストールするシステムに接続します。

```
$ telnet remote_host
```

4. root ユーザーとしてログインしていない場合は、次のコマンドを入力してユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
password:
#
```

- X サーバー・ソフトウェアがインストールされている PC またはその他のシステムからソフトウェアをインストールする手順は、次のとおりです。

注意： この手順の詳細は、必要に応じて X サーバーのドキュメントを参照してください。使用中の X サーバー・ソフトウェアによっては、作業を異なる順序で完了することが必要な場合もあります。

1. X サーバー・ソフトウェアを起動します。
2. X サーバー・ソフトウェアのセキュリティ設定を構成して、リモート・ホストの X アプリケーションをローカル・システム上で表示できるように構成します。
3. ソフトウェアをインストールするリモート・システムに接続し、そのシステム上で X 端末 (xterm) などのターミナル・セッションを開始します。
4. リモート・システムで root ユーザーとしてログインしていない場合は、次のコマンドを入力してユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
password:
```

ハードウェア要件の確認

システムは、次の最小ハードウェア要件を満たしている必要があります。

- 256 MB の物理 RAM
- 512 MB のスワップ領域
- /tmp ディレクトリに 400 MB の空きディスク領域
- 次の表に示す空きディスク領域のサイズは、プラットフォームとインストールする製品に応じて異なります。

インストールする製品	プラットフォーム	必要なディスク領域
Oracle HTTP Server	AIX、HP-UX、Tru64 UNIX	700 MB
	zSeries Linux	500 MB
	Linux x86、Linux Itanium、Solaris	400 MB
Oracle HTTP Server と Oracle HTML DB	AIX、HP-UX、Tru64 UNIX	1050 MB
	zSeries Linux	800 MB
	Linux x86、Linux Itanium、Solaris	700 MB

システムがこれらの要件を満たしているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. 物理 RAM のサイズを判別するには、次のいずれかのコマンドを入力します。

プラットフォーム	コマンド
AIX	# /usr/sbin/lssattr -E -l sys0 -a realmem
HP-UX	# grep "Physical:" /var/adm/syslog/syslog.log
Linux	# grep MemTotal /proc/meminfo
Solaris	# /usr/sbin/prtconf grep "Memory size"
Tru64 UNIX	# /bin/vmstat -P grep "Total Physical Memory"

システムにインストールされている物理 RAM のサイズが必要サイズより小さい場合は、先に進む前にメモリーを増設する必要があります。

2. 構成済スワップ領域のサイズを判別するには、次のいずれかのコマンドを入力します。

プラットフォーム	コマンド
AIX	# /usr/sbin/lspcs -a
HP-UX	# /usr/sbin/swapinfo -a
Linux	# grep SwapTotal /proc/meminfo
Solaris	# /usr/sbin/swap -s
Tru64 UNIX	# /sbin/swapon -s

追加のスワップ領域を構成する方法は、必要に応じてオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

3. /tmp ディレクトリで使用可能なディスク領域の量を判別するには、次のいずれかのコマンドを入力します。

- HP-UX の場合
 - # bdf /tmp
- 他のオペレーティング・システムの場合
 - # df -k /tmp

/tmp ディレクトリで使用可能なディスク領域が 400 MB 未満の場合は、次のいずれかの手順を実行します。

- /tmp ディレクトリから不要なファイルを削除して、必要なディスク領域を準備します。
 - oracle ユーザーの環境を設定するときに（後述）、TEMP および TMPDIR 環境変数を設定します。
 - /tmp ディレクトリを含むファイル・システムを拡張します。ファイル・システムの拡張については、必要に応じてシステム管理者に問い合せてください。
4. システム上の空きディスク領域の量を判別するには、次のいずれかのコマンドを入力します。
- HP-UX の場合

```
# bdf
```

 - 他のオペレーティング・システムの場合

```
# df -k
```
5. システム・アーキテクチャでソフトウェアを実行できるかどうかを判別するには、次のいずれかのコマンドを入力します。

注意： 予期される出力が表示されない場合、このシステムにはソフトウェアをインストールできません。

プラットフォーム	コマンド	予期される出力
AIX	# /usr/bin/getconf HARDWARE_BITMODE	64
HP-UX	# /bin/getconf KERNEL_BITS	64
Linux (x86 および Itanium)	# grep "model name" /proc/cpuinfo	このコマンドを実行すると、プロセッサのタイプが表示されます。プロセッサのアーキテクチャが、インストールする Oracle ソフトウェアのリリースと一致していることを確認してください。
Solaris	# /bin/isainfo -kv	SPARC システムの場合 64-bit sparcv9 kernel modules x86 システムの場合 32-bit i386 kernel modules

ソフトウェア要件の確認

オペレーティング・システムに応じて、次の該当する項を参照してソフトウェア要件を確認してください。

- 3-7 ページ「[AIX でのソフトウェア要件の確認](#)」
- 3-9 ページ「[HP-UX でのソフトウェア要件の確認](#)」
- 3-13 ページ「[Linux でのソフトウェア要件の確認](#)」
- 3-19 ページ「[Solaris でのソフトウェア要件の確認](#)」
- 3-23 ページ「[Tru64 UNIX でのソフトウェア要件の確認](#)」

AIX でのソフトウェア要件の確認

システムに必要なソフトウェアとパッチがインストールされているかどうかを確認します。

必要なソフトウェアの確認

システムに次のソフトウェアがインストールされているかどうかを確認します。これらの要件を確認する手順は、表の後に説明します。

インストール・タイプ または製品	要件
すべてのインストール	オペレーティング・システムのバージョンとメンテナンス・レベル AIX 5L version 5.2、Maintenance Level 1 以上
	オペレーティング・システムのファイルセット bos.adt.base bos.adt.lib bos.adt.libm bos.perf.libperfstat bos.perf.perfstat bos.perf.proctools

システムがこれらの要件を満たしているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. インストールされている AIX のバージョンを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# oslevel -r
```

オペレーティング・システムが AIX 5.2.0.0 Maintenance Level 1 (5200-01) より前のバージョンの場合は、オペレーティング・システムをこのレベルにアップグレードしてください。AIX 5L version 5.2 メンテナンス・パッケージは、次の Web サイトから入手できます。

```
http://www-912.ibm.com/eserver/support/fixes/
```

2. 必要なファイルセットがインストールされ、コミットされているかどうかを判別するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# lsllpp -l bos.adt.base bos.adt.lib bos.adt.libm bos.perf.perfstat \
bos.perf.libperfstat bos.perf.proctools
```

ファイルセットがインストールおよびコミットされていない場合は、インストールします。ファイルセットのインストールの詳細は、オペレーティング・システムまたはソフトウェアのドキュメントを参照してください。

必要なパッチの確認

システムに次のパッチがインストールされているかどうかを確認します。これらの要件を確認する手順は、表の後に説明します。

インストール・タイプ または製品	要件
すべてのインストール	Authorized Problem Analysis Reports (APAR) - IY43980: libperfstat.h not ANSI-compliant - IY44810: DSI IN BMRECYCLE - IY45462: Definition of isnan() in math.h incorrect - IY45707: J2 READAHEAD/CIO INTERACTION - IY46214: dropping partial connections leaves them on so_q0 - IY46605: exec of 32 bit application can fail on 64 bit kernel - IY48525: SDK 1.4.1 32-BIT SR1: CA141-20030930 - IY51801: race condition in aio_nwait_timeout

システムがこれらの要件を満たしているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. APAR がインストールされているかどうかを判別するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/instfix -i -k "IY43980 IY44810 IY45462 IY45707 IY46214 IY46605 \
IY48525 IY51801"
```

APAR がインストールされていない場合は、次の Web サイトからダウンロードしてインストールします。

```
http://www-912.ibm.com/eserver/support/fixes/
```

2. インストール前の作業を続行するには、3-25 ページの「[必要な UNIX グループおよびユーザーの作成](#)」に進みます。

HP-UX でのソフトウェア要件の確認

システムに必要なソフトウェアとパッチがインストールされているかどうかを確認します。

必要なソフトウェアの確認

システムに次のソフトウェアがインストールされているかどうかを確認します。これらの要件を確認する手順は、表の後に説明します。

インストール・タイプ または製品	要件
すべてのインストール	オペレーティング・システムのバージョン ■ PA-RISC (64 ビット) システムの場合 HP-UX 11i (11.11) PA-RISC ■ Itanium システムの場合 HP-UX 11i v2 (11.23)

インストールされている HP-UX のバージョンを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -a
HP-UX hostname B.11.11 U 9000/800 109444686 unlimited-user license
```

この例では、HP-UX 11i のバージョンは 11.11 です。

必要なパッチの確認

システムに次のパッチがインストールされているかどうかを確認します。これらの要件を確認する手順は、表の後に説明します。

注意： リストされているパッチの最新バージョンがシステムにインストールされている可能性があります。リストされているパッチがインストールされていない場合、リストのバージョンをインストールする前に、最新バージョンがインストールされているかどうかを判別してください。

インストール・タイプ または製品	要件
すべてのインストール	Quality Pack のバンドル HP-UX 11i (11.11) の場合 HP-UX 11i Quality Pack (GOLDQPK11i)、2003 年 6 月以降 GOLDAPPS11i GOLDBASE11i HP-UX 11i v2 (11.23) の場合 現在は要件なし
すべてのインストール	HP-UX 11i (11.11) のパッチ - PHCO_28123: cumulative SAM patch - PHKL_29198: Psets Enablement Patch; top(1) - PHNE_28476: Cumulative STREAMS Patch - PHNE_28923: LAN product cumulative patch - PHSS_28871: ld(1) and linker tools cumulative patch - PHSS_28880: HP aC++ -AA runtime libraries (aCC A.03.50) HP-UX 11i v2 (11.23) のパッチ - PHSS_29658: Aries cumulative patch - PHSS_29660: linker + fdp cumulative patch

インストール・タイプ または製品	要件
すべてのインストール	HP-UX 11i (11.11) 上の JDK のパッチ ■ PHCO_26331: mountall cumulative patch, Dev IDs enabler ■ PHCO_29109: Pthread enhancement and fixes ■ PHKL_25468: eventport (/dev/poll) pseudo driver ■ PHKL_25842: Thread Abort ■ PHKL_25993: thread nostop for NFS, rlimit, Ufalloc fix ■ PHKL_25994: Thread NOSTOP, Psets Enablement, Ufalloc ■ PHKL_25995: ufalloc;VxFS3.5;SPP fragmentation ■ PHKL_26468: Shared synchronization performance support ■ PHKL_28489: copyin EFAULT, LDCD access type 注意: JDK1.4.2 に必要なその他のパッチの詳細は、次の Web サイトを参照してください。 http://www.hp.com/products1/unix/java/patches/index.html

システムがこれらの要件を満たしているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. PA-RISC システムの場合のみ、次のコマンドを入力して、HP-UX 11i Quality Pack がインストールされているかどうかを判別します。

```
# /usr/sbin/swlist -l bundle | grep GOLD
```

Quality Pack がインストールされていない場合、または日付が 2003 年 6 月より前の場合は、次の Web サイトから最新の Quality Pack をダウンロードして、インストールしてください。

http://www.software.hp.com/SUPPORT_PLUS/qpk.html

2. パッチがインストールされているかどうかを判別するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/swlist -l patch | grep PHSS_28880
```

または、次のコマンドを入力すると、インストール済みのパッチがすべてリストされます。

```
# /usr/sbin/swlist -l patch | more
```

必要なパッチがインストールされていない場合は、次の Web サイトからダウンロードしてインストールします。

<http://itresourcecenter.hp.com>

Web サイトに最新バージョンのパッチが表示されている場合は、そのバージョンをダウンロードしてインストールしてください。

必要なシンボリック・リンクの作成

注意： このタスクが必要となるのは、Motif 2.1 Development Environment パッケージ (X11MotifDevKit.MOTIF21-PRG) がインストールされていない場合のみです。

このソフトウェアのインストール後に Oracle 製品を正常に再リンクできるように、次のコマンドを入力して、必要な X ライブラリ・シンボリック・リンクを /usr/lib ディレクトリに作成します。

```
# cd /usr/lib
# ln -s libX11.3 libX11.sl
# ln -s libXIE.2 libXIE.sl
# ln -s libXext.3 libXext.sl
# ln -s libXhp11.3 libXhp11.sl
# ln -s libXi.3 libXi.sl
# ln -s libXm.4 libXm.sl
# ln -s libXp.2 libXp.sl
# ln -s libXt.3 libXt.sl
# ln -s libXtst.2 libXtst.sl
```

インストール前の作業を続行するには、3-25 ページの「必要な UNIX グループおよびユーザーの作成」に進みます。

Linux でのソフトウェア要件の確認

システムに必要なソフトウェアとパッチがインストールされているかどうかを確認します。

必要なソフトウェアの確認

システム・アーキテクチャに応じて、次のいずれかの表に示すソフトウェアがシステムにインストールされているかどうかを確認します。

- [表 3-1「x86 システムにインストールするためのソフトウェア要件」](#)
- [表 3-2「Itanium システムにインストールするためのソフトウェア要件」](#)
- [表 3-3「zSeries システムにインストールするためのソフトウェア要件」](#)

これらの要件を確認する手順は、表の後に説明します。

表 3-1 x86 システムにインストールするためのソフトウェア要件

項目	要件
オペレーティング・システム	次のいずれかのオペレーティング・システム・バージョン ■ Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 (Update 3 以上) ■ Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3 (Update 2 以上) ■ SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 8 (service pack 3 以上) ■ SUSE Linux Enterprise Server 9
カーネル・バージョン	システムは、次のカーネル・バージョン（または上位バージョン）を実行している必要があります。 Red Hat Enterprise Linux 2.1 の場合 2.4.9、エラータ 34 (2.4.9-e.34 など) Red Hat Enterprise Linux 3 の場合 2.4.21-15.EL SUSE Linux Enterprise Server 8 の場合 2.4.21-138 SUSE Linux Enterprise Server 9 の場合 2.6.5-7.5

表 3-1 x86 システムにインストールするためのソフトウェア要件（続き）

項目	要件
パッケージ	次のパッケージ（または上位バージョン）をインストールする必要があります。 Red Hat Enterprise Linux 2.1 の場合 make-3.79.1 glibc-2.2.4-32 gcc-2.96-128 gcc-c++-2.96-128 libstdc++-2.96-128 openmotif-2.1.30-11 Red Hat Enterprise Linux 3 の場合 make-3.79.1 gcc-3.2.3-34 glibc-2.3.2-95.20 compat-db-4.0.14-5 compat-gcc-7.3-2.96.128 compat-gcc-c++-7.3-2.96.128 compat-libstdc++-7.3-2.96.128 compat-libstdc++-devel-7.3-2.96.128 openmotif21-2.1.30-8 setarch-1.3-1 gnome-libs-1.4.1.2.90-34.1 SUSE Linux Enterprise Server 8 の場合 make-3.79.1 gcc-3.2.2-38 gcc-c++-3.2.2-38 openmotif-2.2.2-124 SUSE Linux Enterprise Server 9 の場合 gcc-3.3.3-43 gcc-c++-3.3.3-43 glibc-2.3.3-98 libaio-0.3.98-18 libaio-devel-0.3.98-18 make-3.80 openmotif-libs-2.2.2-519.1

表 3-2 Itanium システムにインストールするためのソフトウェア要件

項目	要件
オペレーティング・システム	次のいずれかのオペレーティング・システム・バージョン ■ Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 (Update 3 以上) ■ Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3 (Update 1 以上) ■ SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 8 (service pack 3 以上) ■ SUSE Linux Enterprise Server 9
カーネル・バージョン	システムは、次のカーネル・バージョン (または上位バージョン) を実行している必要があります。 Red Hat Enterprise Linux 2.1 の場合 2.4.18、エラータ 37 (2.4.18-e.37 など) Red Hat Enterprise Linux 3 の場合 2.4.21-4.EL SUSE Linux Enterprise Server 8 の場合 2.4.21-241 SUSE Linux Enterprise Server 9 の場合 2.6.5-7.5

表 3-2 Itanium システムにインストールするためのソフトウェア要件（続き）

項目	要件
パッケージ	次のパッケージ（または上位バージョン）をインストールする必要があります。 Red Hat Enterprise Linux 2.1 の場合 make-3.79.1 glibc-2.2.4-32 gcc-2.96-128 gcc-c++-2.96-128 libstdc++-2.96-128 openmotif-2.1.30-11 libaio-0.3.92-1 libaio-devel-0.3.92-1 Red Hat Enterprise Linux 3 の場合 make-3.79.1 gcc-3.2.3-20 gcc-c++-3.2.3-20 glibc-2.3.2-95.3 compat-db-4.0.14-5 compat-gcc-7.3-2.96.128 compat-gcc-c++-7.3-2.96.128 compat-libstdc++-7.3-2.96.128 compat-libstdc++-devel-7.3-2.96.128 openmotif21-2.1.30-8 setarch-1.3-1 gnome-libs-1.4.1.2.90-34.1 SUSE Linux Enterprise Server 8 の場合 make-3.79.1 gcc-3.2.2-23 gcc-c++-3.2.2-23 glibc-2.2.5-161 openmotif-2.2.2-125 SUSE Linux Enterprise Server 9 の場合 gcc-3.3.3-43 gcc-c++-3.3.3-43 glibc-2.3.3-98 libaio-0.3.98-18 libaio-devel-0.3.98-18 make-3.80 openmotif-libs-2.2.2-519.1

表 3-3 zSeries システムにインストールするためのソフトウェア要件

項目	要件
オペレーティング・システム	次のオペレーティング・システム・バージョン ■ SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 8 (service pack 3 以上)
カーネル・バージョン	システムは、次のカーネル・バージョン（または上位バージョン）を実行している必要があります。 SUSE Linux Enterprise Server 8 の場合 2.4.21-112
パッケージ	次のパッケージ（または上位バージョン）をインストールする必要があります。 SUSE Linux Enterprise Server 8 の場合 gcc-3.2.2-29 gcc-c++-3.2.2-29 glibc-2.2.5-108 glibc-devel-32bit-8.1-9 libaio-0.3.15-106 make-3.79.1 binutils-2.14.90.0.5-41 openmotif-2.2.2-52

システムがこれらの要件を満たしているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. インストールされている **Linux** のディストリビューションおよびバージョンを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/issue
```

注意： サポートされているのは、前述の表に示したディストリビューションおよびバージョンのみです。他のバージョンの **Linux** には、このソフトウェアをインストールしないでください。

2. 必要なカーネル・バージョンがインストールされているかどうかを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r
```

カーネル・バージョンが必要なバージョンより古い場合、**Linux** ベンダーの Web サイトから必要なバージョンまたはそれ以上のバージョンをダウンロードし、インストールします。

3. 必要なパッケージがインストールされているかどうかを判別するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがインストールされていない場合は、**Linux** ディストリビューションのメディアからインストールするか、または **Linux** ベンダーの Web サイトから必要なパッケージ・バージョンをダウンロードします。

4. インストール前の作業を続行するには、3-25 ページの「[必要な UNIX グループおよびユーザーの作成](#)」に進みます。

Solaris でのソフトウェア要件の確認

システムに必要なソフトウェアとパッチがインストールされているかどうかを確認します。

必要なソフトウェアの確認

システムに次のソフトウェアがインストールされているかどうかを確認します。これらの要件を確認する手順は、表の後に説明します。

インストール・タイプ または製品	要件
---------------------	----

すべてのインストール	
------------	--

オペレーティング・システムのバージョン

SPARC システムの場合

Solaris 8 または Solaris 9、64-bit

x86 システムの場合

Solaris 9

オペレーティング・システム・パッケージ

SPARC システムおよび x86 システムの場合

SUNWarc
SUNWbtool
SUNWhea
SUNWlibm
SUNWlibms
SUNWsprot
SUNWtoo
SUNWilof
SUNWilcs
SUNWi15cs
SUNWxwfont

SPARC システムのみの場合

SUNWspox

注意：ロケールによっては、Java 用の追加フォント・パッケージも必要になる場合があります。詳細は、次の Web サイトで確認してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.4.2/font-requirements.html>

システムがこれらの要件を満たしているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. インストールされている Solaris のバージョンを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r  
5.9
```

この例では、バージョンが Solaris 9 (5.9) と表示されます。オペレーティング・システムのアップグレードについては、必要に応じてオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

2. 必要なパッケージがインストールされているかどうかを判別するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# pkginfo -i SUNWarc SUNWbtool SUNWhea SUNWlibm SUNWlibms SUNWsprot \  
SUNWsprox SUNWtoo SUNWilof SUNWilcs SUNWi15cs SUNWxwfont
```

パッケージがインストールされていない場合は、インストールします。パッケージのインストールの詳細は、オペレーティング・システムまたはソフトウェアのドキュメントを参照してください。

必要なパッチの確認

システムに次のパッチがインストールされているかどうかを確認します。これらの要件を確認する手順は、表の後に説明します。

注意： 次の表に示すパッチのバージョンは最小バージョンです。同じパッチの上位バージョンもサポートされています。

**インストール・タイプ
または製品****要件**

すべてのインストール

Solaris 8 のパッチ (SPARC のみ)

これらのパッチはすべて J2SE Patch Cluster for Solaris 8 に付属しています。

- 108528-23、SunOS 5.8: kernel update patch
- 108652-66、X11 6.4.1: Xsun patch
- 108773-18、SunOS 5.8: IIIM and X I/O Method patch
- 108921-16、CDE 1.4: dtwm patch
- 108940-53、Motif 1.2.7 and 2.1.1: Runtime lib. patch for Solaris 8
- 108987-13、SunOS 5.8: Patch for patchadd and patchrm
- 108989-02、/usr/kernel/sys/acctctl & /.../exacsys patch
- 108993-18、SunOS 5.8: LDAP2 client, libc, ... lib. patch
- 109147-24、SunOS 5.8: linker patch
- 110386-03、SunOS 5.8: RBAC Feature Patch
- 111023-02、SunOS 5.8: /kernel/fs/mntfs and ... sparcv9/mntfs
- 111111-03、SunOS 5.8: /usr/bin/nawk patch
- 111308-03、SunOS 5.8: /usr/lib/libmtmalloc.so.1 patch
- 111310-01、SunOS 5.8: /usr/lib/libdhcpagent.so.1 patch
- 112396-02、SunOS 5.8: /usr/bin/fgrep patch

次のパッチが追加されています。

- 111721-04、SunOS 5.8: Math Library (libm) patch
 - 112003-03、SunOS 5.8: Unable to load fontset ... iso-1 or iso-15
 - 112138-01、SunOS 5.8: usr/bin/domainname patch
-

インストール・タイプ または製品	要件
すべてのインストール	Solaris 9 のパッチ (SPARC) ■ 112233-11、SunOS 5.9: Kernel Patch ■ 111722-04、SunOS 5.9: Math Library (libm) patch Solaris 9 のパッチ (x86) ■ 111713-06、SunOS 5.9_x86: Shared library patch for C++ ■ 111728-03、SunOS 5.9_x86: Math Library (libm) patch ■ 112234-12、SunOS 5.9_x86: Kernel Patch ■ 113986-08、SunOS 5.9_x86: linker Patch ■ 115114-02、SunOS 5.9_x86: Patch for assembler ■ 116013-02、SunOS 5.9_x86: ps utility patch (ローカルの Sun ソリューション・センターでのみ入手可能)

システムがこれらの要件を満たしているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. オペレーティング・システムのパッチがインストールされているかどうかを判別するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/patchadd -p | grep patch_number
```

オペレーティング・システムのパッチがインストールされていない場合は、次の Web サイトからダウンロードしてインストールします。

<http://sunsolve.sun.com>

2. インストール前の作業を続行するには、3-25 ページの「必要な UNIX グループおよびユーザーの作成」に進みます。

Tru64 UNIX でのソフトウェア要件の確認

システムに必要なソフトウェアとパッチがインストールされているかどうかを確認します。

必要なソフトウェアの確認

システムに次のソフトウェアがインストールされているかどうかを確認します。これらの要件を確認する手順は、表の後に説明します。

インストール・タイプ または製品	要件
すべてのインストール	オペレーティング・システムのバージョン HP Tru64 UNIX V5.1B
	Software Development Kit (SDK) v 1.4.2 for the Tru64 UNIX Java プラットフォーム用のオペレーティング・システム (JDK 1.4.2)
	オペレーティング・システムのサブセット
	OSFCMPLRS
	OSFLIBA
	OSFPGMR
	OSFSER
	OSFX11

システムがこれらの要件を満たしているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. インストールされている **Tru64 UNIX** のバージョンを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/sizer -v
Compaq Tru64 UNIX V5.1B (Rev. 2650); Mon Nov  3 10:13:28 PST 200
```

この例では、バージョンが **V5.1B** と表示されます。オペレーティング・システムのアップグレードについては、必要に応じてオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

2. **Java SDK 1.4.2** がインストールされているかどうかを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/setld -i JAVA142 | more
```

Java SDK 1.4.2 がインストールされている場合、このコマンドは、インストールされている全ファイルへのパスをすべて表示します。**Java** ホーム・ディレクトリへのパスをメモしておいてください。インストール中にこの値を指定する必要があります。デフォルトのパスは次のとおりです。

```
/usr/opt/java142
```

このコマンドがサブセット不明のメッセージを戻した場合、Java SDK 1.4.2 はインストールされていません。Java SDK 1.4.2-3 以上がインストールされていない場合は、次の Web サイトからダウンロードしてインストールします。

<http://www.compaq.com/java/download/index.html>

3. 必要なソフトウェアのサブセットがインストールされているかどうかを判別するには、次のいずれかのコマンドを入力します。

- システムにインストールされている全ソフトウェア・サブセットのリストを表示するには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/setld -i | more
```

- 特定のソフトウェア・サブセットがインストールされているかどうかを判別するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/setld -i | grep subsetname
```

必要なパッチの確認

システムに次のパッチがインストールされているかどうかを確認します。これらの要件を確認する手順は、表の後に説明します。

インストール・タイプ または製品	要件
すべてのインストール	Tru64 UNIX V5.1B Patch Kit 2 以上 T64V51BB22AS0002-20030415 次のパッチ・キットも必要です。 ■ HP Tru64 UNIX 5.1B PK2 BL22 Fixes for AdvFS Panic in _OtsMove; and Possible Memory Corruption T64KIT0020879-V51BB22-E-20031125 ■ HP Tru64 UNIX - IP マルチキャスト・パケットにおける問題 T64KIT0019662-V51BB22-E-20030818 ■ HP Tru64 UNIX V5.1B PK2 (BL22) ERP Kit - 複数のアプリケーションにおける同一ファイル上の排他ロックの付与の修正 T64KIT0021665-V51BB22-E-20040220 ■ Tru64 UNIX V5.1B PK2/BL22 Early Release Patch - 潜在的なアプリケーション・コア・ダンプの修正 T64KIT0021681-V51BB22-E-20040223

必要なパッチ・キットがインストールされているかどうかを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/dupatch -track -type kit
```

このコマンドを実行しても必要なパッチ・キットに関して前述の表に示した識別子（または上位パッチ・キット・レベルの識別子）が表示されない場合は、次の **Web** サイトから最新のパッチ・キットをダウンロードしてインストールしてください（この **Web** サイトにアクセスするには登録が必要です）。

<http://itrc.hp.com/service/patch/mainPage.do>

必要な UNIX グループおよびユーザーの作成

このシステムへ Oracle ソフトウェアを初めてインストールするかどうか、およびインストールする製品によっては、次の UNIX グループおよび UNIX ユーザーの作成が必要になる場合があります。

■ Oracle インベントリ・グループ (oinstall)

Oracle ソフトウェアをシステムに初めてインストールする場合は、このグループを作成する必要があります。通常、このグループ用に選択する名前は **oinstall** です。このグループは、システムにインストールされている全 Oracle ソフトウェアのカタログである Oracle インベントリの所有者となります。

注意：すでに Oracle ソフトウェアがシステムにインストールされている場合は、既存の Oracle インベントリ・グループを、新規 Oracle ソフトウェアのインストールに使用する UNIX ユーザーのプライマリ・グループにする必要があります。既存の Oracle インベントリ・グループを識別する方法については後述します。

■ Oracle ソフトウェア所有者ユーザー (oracle)

Oracle ソフトウェアをシステムに初めてインストールする場合は、このユーザーを作成する必要があります。このユーザーは、インストールされる全ソフトウェアの所有者となります。通常、このユーザー用に選択する名前は **oracle** です。このユーザーのプライマリ・グループには、Oracle インベントリ・グループを指定する必要があります。

システム上の Oracle ソフトウェアの全インストールに対して、1 つの Oracle インベントリ・グループが必要です。初回インストール後は、そのシステムへの以降のすべての Oracle ソフトウェアのインストールに、同じ Oracle インベントリ・グループを使用する必要があります。ただし、個別にインストールする場合は、異なる Oracle ソフトウェア所有者ユーザーを作成して、別のインストールにすることはできます。

必要な UNIX ユーザーおよびグループの作成方法については後述します。

注意： ローカル・ユーザーおよびグループの作成方法については後述します。ローカル・ユーザーおよびグループを作成するかわりに、**Network Information Service (NIS)** などのディレクトリ・サービスに適切なユーザーおよびグループを作成できます。ディレクトリ・サービスの使用方法は、システム管理者に問い合わせるか、またはオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

Oracle インベントリ・グループの作成

Oracle インベントリ・グループが存在しない場合は、作成する必要があります。ここでは、Oracle インベントリ・グループが存在する場合にその名前を判別する方法と、必要な場合に作成する方法について説明します。

Oracle インベントリ・グループの有無の判別

Oracle ソフトウェアをシステムに初めてインストールするときに、インストーラにより `oraInst.loc` ファイルが作成されます。このファイルで、**Oracle** インベントリ・グループ名および **Oracle** インベントリ・ディレクトリのパスが識別されます。**Oracle** インベントリ・グループが存在するかどうかを判別するには、次のコマンドを入力します。

- AIX、Linux x86 または Linux Itanium の場合

```
# more /etc/oraInst.loc
```

- 他のオペレーティング・システムの場合

```
# more /var/opt/oracle/oraInst.loc
```

`oraInst.loc` ファイルが存在する場合、このコマンドの出力は次のようになります。

```
inventory_loc=/u01/app/oracle/oraInventory
inst_group=oinstall
```

`inst_group` パラメータは、**Oracle** インベントリ・グループ名 (`oinstall`) を示します。

Oracle インベントリ・グループの作成

`oraInst.loc` ファイルが存在しない場合は、オペレーティング・システムに応じて次の手順で **Oracle** インベントリ・グループを作成します。

- AIX の場合

1. 次のコマンドを入力します。

```
# smit security
```

2. 適切なメニュー項目を選択して `oinstall` グループを作成します。

3. [F10] キーを押して終了します。

- 他のオペレーティング・システムの場合

次のコマンドを入力して oinstall グループを作成します。

```
# /usr/sbin/groupadd oinstall
```

Oracle ソフトウェア所有者ユーザーの作成

次の場合には、Oracle ソフトウェア所有者ユーザーを作成する必要があります。

- Oracle ソフトウェア所有者ユーザーが存在しない場合（Oracle ソフトウェアを初めてインストールする場合など）。
- Oracle ソフトウェア所有者ユーザーは存在するが、別の UNIX ユーザーを使用する場合。

既存の Oracle ソフトウェア所有者ユーザーの有無の判別

oracle という名前の Oracle ソフトウェア所有者ユーザーが存在するかどうかを判別するには、次のいずれかのコマンドを入力します。

- Solaris の場合

```
# id -a oracle
```

- 他のオペレーティング・システムの場合

```
# id oracle
```

oracle ユーザーが存在する場合、このコマンドの出力は次のようになります。

```
uid=440(oracle) gid=200(oinstall) groups=201(dba),202(oper)
```

ユーザーが存在する場合は、既存のユーザーを使用するか、新規ユーザーを作成するかどうかを決定します。既存のユーザーを使用する場合は、そのユーザーのプライマリ・グループが Oracle インベントリ・グループであることを確認します。

詳細は、次のいずれかの項を参照してください。

注意： 既存のユーザーを使用または変更する前に、必要に応じてシステム管理者に問い合せてください。

- 既存の Oracle ソフトウェア所有者ユーザーを使用する場合で、そのユーザーのプライマリ・グループが Oracle インベントリ・グループの場合は、3-30 ページの「[必須ソフトウェア・ディレクトリの識別](#)」を参照してください。
- 既存のユーザーを変更する場合は、3-29 ページの「[既存の Oracle ソフトウェア所有者ユーザーの変更](#)」を参照してください。
- 新規ユーザーを作成する場合は、次の項を参照してください。

新規 Oracle ソフトウェア所有者ユーザーの作成

Oracle ソフトウェア所有者ユーザーが存在しない場合、または新規 Oracle ソフトウェア所有者ユーザーが必要な場合は、オペレーティング・システムに応じて次の手順で作成します。次の手順では、oracle という名前のユーザーがすでに存在する場合を除き、ユーザー名 oracle を使用してください。

- AIX の場合
 1. 次のコマンドを入力します。


```
# smit security
```
 2. 適切なメニュー項目を選択し、次の情報を指定して oracle ユーザーを作成します。
 - 「Primary GROUP」フィールドで、oinstall などの Oracle インベントリ・グループを指定します。
 - 「Group SET」フィールドで、必要なセカンダリ・グループを指定します。

注意： oracle ユーザーの UID は 65536 未満に設定する必要があります。

3. [F10] キーを押して終了します。
 4. oracle ユーザーのパスワードを設定します。


```
# passwd oracle
```
- 他のオペレーティング・システムの場合
 1. oracle ユーザーを作成するには、次のようなコマンドを入力します。


```
# /usr/sbin/useradd -g oinstall[ -G dba] oracle
```

各項目の意味は次のとおりです。

 - -g オプションでは、oinstall などのプライマリ・グループを指定します。これは、Oracle インベントリ・グループを指定する必要があります。
 - -G オプションは、オプションのセカンダリ・グループを指定します。

2. oracle ユーザーのパスワードを設定します。

```
# passwd oracle
```

作業を進めるには、3-30 ページの「[必須ソフトウェア・ディレクトリの識別](#)」を参照してください。

既存の Oracle ソフトウェア所有者ユーザーの変更

oracle ユーザーが存在し、プライマリ・グループが oinstall ではない場合は、オペレーティング・システムに応じて次の手順でユーザーを変更できます。

■ AIX の場合

1. 次のコマンドを入力します。

```
# smit security
```

2. 適切なメニュー項目を選択して oracle ユーザーを変更します。
3. 「Primary GROUP」フィールドで、oinstall などの Oracle インベントリ・グループを指定します。
4. 「Group SET」フィールドで、必要なセカンダリ・グループを指定します。
5. [F10] キーを押して終了します。

■ 他のオペレーティング・システムの場合

次のようなコマンドを入力し、-g オプションを使用してプライマリ・グループを指定し、-G オプションを使用して必要なセカンダリ・グループを指定します。

```
# /usr/sbin/usermod -g oinstall -G dba oracle
```

必須ソフトウェア・ディレクトリの識別

Oracle ソフトウェアについて、次の 3 つのディレクトリを識別または作成する必要があります。

- Oracle ベース・ディレクトリ
- Oracle インベントリ・ディレクトリ
- Oracle ホーム・ディレクトリ

ここでは、各ディレクトリの要件について説明します。

Oracle ベース・ディレクトリ

Oracle ベース・ディレクトリは、Oracle ソフトウェア・インストールの最上位ディレクトリとなります。Windows システム上で Oracle ソフトウェアに使用される C:\¥Oracle ディレクトリに似ています。UNIX システム上では、Optimal Flexible Architecture (OFA) ガイドラインに、Oracle ベース・ディレクトリに次のようなパスを使用するという推奨事項があります。

```
/mount_point/app/oracle_sw_owner
```

各項目の意味は次のとおりです。

- `mount_point` は、Oracle ソフトウェアが格納されるファイル・システムのマウント・ポイント・ディレクトリです。

このマニュアルの例では、マウント・ポイント・ディレクトリに `/u01` を使用しています。ただし、`/oracle` または `/opt/oracle` など、別のマウント・ポイント・ディレクトリを選択できます。
- `oracle_sw_owner` は、`oracle` など、Oracle ソフトウェア所有者の UNIX ユーザー名です。

複数のインストールに同じ Oracle ベース・ディレクトリを使用する方法と、インストールごとに個別の Oracle ベース・ディレクトリを作成する方法があります。様々な UNIX ユーザーが同じシステムに Oracle ソフトウェアをインストールする場合は、各ユーザーが個別の Oracle ベース・ディレクトリを作成する必要があります。次の例の Oracle ベース・ディレクトリは、すべて同じシステムに存在することが可能です。

```
/u01/app/oracle  
/u01/app/orauser  
/opt/oracle/app/oracle
```

次の各項では、インストールに適した既存の Oracle ベース・ディレクトリの識別方法、および必要に応じた新規の Oracle ベース・ディレクトリの作成方法について説明します。

新規の Oracle ベース・ディレクトリを作成するか既存のものを使用するかを問わず、`ORACLE_BASE` 環境変数を設定してこのディレクトリへのフル・パスを指定する必要があります。

Oracle インベントリ・ディレクトリ

Oracle インベントリ・ディレクトリ (oraInventory) には、システムにインストールされた全ソフトウェアのインベントリが格納されます。このディレクトリは、単一システムにインストールされたすべての Oracle ソフトウェアに必須であり、共有のものです。システムに Oracle ソフトウェアを初めてインストールするときには、インストーラからこのディレクトリへのパス指定を求めるプロンプトが表示されます。次のパスを選択することをお勧めします。

```
oracle_base/oraInventory
```

指定したディレクトリが作成され、そこに適切な所有者、グループおよびアクセス権が設定されます。Oracle インベントリ・ディレクトリを手動で作成する必要はありません。

注意： このディレクトリは、すべての Oracle ソフトウェアのインストールで使用されます。必ず定期的にバックアップを作成してください。

すべての Oracle ソフトウェアをシステムから完全に削除する場合を除き、このディレクトリを削除しないでください。

Oracle ホーム・ディレクトリ

Oracle ホーム・ディレクトリは、特定の Oracle 製品のソフトウェアをインストールするために選択するディレクトリです。様々な Oracle 製品、または同じ Oracle 製品の異なるリリースは、個別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする必要があります。インストーラを実行すると、このディレクトリへのパスと識別名の指定を求めるプロンプトが表示されます。Oracle ホーム・ディレクトリは、Oracle ベース・ディレクトリのサブディレクトリとして指定する必要があります。Oracle ホーム・ディレクトリについては、次のようなパスを指定することをお勧めします。

```
oracle_base/product/10.1.0/companion_1
```

指定したディレクトリ・パスが Oracle ベース・ディレクトリの下に作成されます。また、適切な所有者、グループおよびアクセス権も設定されます。Oracle ホーム・ディレクトリを手動で作成する必要はありません。

Oracle ベース・ディレクトリの識別または作成

インストールを開始する前に、既存の Oracle ベース・ディレクトリを識別するか、必要な場合は新規に作成する必要があります。この項の内容は、次のとおりです。

- [既存の Oracle ベース・ディレクトリの識別](#)
- [新規の Oracle ベース・ディレクトリの作成](#)

注意： システムに他の Oracle ベース・ディレクトリが存在する場合にも、新規 Oracle ベース・ディレクトリを作成するように選択できます。

既存の Oracle ベース・ディレクトリの識別

既存の Oracle ベース・ディレクトリのパスが、OFA ガイドラインに準拠していない場合があります。ただし、既存の Oracle インベントリ・ディレクトリまたは既存の Oracle ホーム・ディレクトリを識別する場合に、通常、Oracle ベース・ディレクトリを識別できます。次の手順を実行します。

- 既存の Oracle インベントリ・ディレクトリの識別

次のコマンドを入力して `oraInst.loc` ファイルの内容を表示します。

- AIX、Linux x86 または Linux Itanium の場合

```
# more /etc/oraInst.loc
```

- 他のオペレーティング・システムの場合

```
# more /var/opt/oracle/oraInst.loc
```

`oraInst.loc` ファイルが存在する場合、このコマンドの出力は次のようになります。

```
inventory_loc=/u01/app/oracle/oraInventory
inst_group=oinstall
```

`inventory_loc` パラメータは、Oracle インベントリ・ディレクトリ (`oraInventory`) を示します。`oraInventory` ディレクトリの親ディレクトリは、通常、Oracle ベース・ディレクトリです。前述の例では、`/u01/app/oracle` が Oracle ベース・ディレクトリです。

- 既存の Oracle ホーム・ディレクトリの識別

次のコマンドを入力して `oratab` ファイルの内容を表示します。

- Solaris の場合

```
# more /var/opt/oracle/oratab
```

- 他のオペレーティング・システムの場合

```
# more /etc/oratab
```

oratab ファイルが存在する場合は、次のような行が含まれています。

```
*:/u03/app/oracle/product/10.1.0/db_1:N
*/opt/orauser/infra_904:N
*/oracle/9.2.0:N
```

各行で指定されているディレクトリ・パスは、Oracle ホーム・ディレクトリを示します。使用する Oracle ソフトウェア所有者のユーザー名が末尾に付いているディレクトリ・パスが、Oracle ベース・ディレクトリとして有効な選択となります。前述の例で、ソフトウェアのインストールに oracle ユーザーを使用する場合は、次のディレクトリのどちらかを選択できます。

```
/u03/app/oracle
/oracle
```

注意： 可能な場合は、1 行目のようなディレクトリ・パス (/u03/app/oracle) を選択してください。このパスは OFA ガイドラインに準拠しています。

決定した方法に応じて、次のどちらかを参照してください。

- Oracle ベース・ディレクトリが存在し、それを使用する場合は、3-34 ページの「[oracle ユーザーの環境の構成](#)」を参照してください。

oracle ユーザーの環境を構成するときに（後述）、選択したディレクトリを指定するように ORACLE_BASE 環境変数を設定します。

- Oracle ベース・ディレクトリがシステムに存在しない場合、または新規の Oracle ベース・ディレクトリを作成する場合は、次の項を参照してください。

新規の Oracle ベース・ディレクトリの作成

適切なファイル・システムを識別する手順は、次のとおりです。

1. df -k コマンド（または HP-UX では bdf コマンド）を使用して、マウントされている各ファイル・システムの空きディスク領域を判断します。
2. 表示される出力から、適切な空き領域のあるファイル・システムを識別します。
3. 識別したファイル・システム用のマウント・ポイント・ディレクトリの名前をメモします。

Oracle ベース・ディレクトリを作成し、適切な所有者、グループおよびアクセス権を指定する手順は、次のとおりです。

1. 次のような各コマンドを入力して、識別したマウント・ポイント・ディレクトリに推奨サブディレクトリを作成し、それに対する適切な所有者、グループおよびアクセス権を設定します。

```
# mkdir -p /mount_point/app/oracle_sw_owner
# chown -R oracle:oinstall /mount_point/app/oracle_sw_owner
# chmod -R 775 /mount_point/app/oracle_sw_owner
```

識別したマウント・ポイントが /u01 で、oracle が Oracle ソフトウェア所有者のユーザー名の場合、推奨される Oracle ベース・ディレクトリ・パスは次のようになります。

```
/u01/app/oracle
```

2. この後の項で oracle ユーザーの環境を構成するときに、ORACLE_BASE 環境変数を設定してこのディレクトリを指定してください。

oracle ユーザーの環境の構成

インストーラは oracle アカウントから実行します。ただし、インストーラを起動する前に、oracle ユーザーの環境を構成する必要があります。環境を構成するには、次の設定が必要です。

- シェル起動ファイルで、デフォルトのファイル・モード作成マスク (umask) を 022 に設定します。
- DISPLAY および ORACLE_BASE 環境変数を設定します。

oracle ユーザーの環境を設定する手順は、次のとおりです。

1. X 端末 (xterm) などの新規ターミナル・セッションを開始します。
2. 次のコマンドを入力して、X Window アプリケーションがこのシステムに表示されるかどうかを確認します。

```
$ xhost +
```

3. ソフトウェアをインストールするシステムにログインしていない場合は、そのシステムに oracle ユーザーとしてログインします。
4. oracle ユーザーとしてログインしていない場合は、ユーザーを oracle に切り替えます。

```
$ su - oracle
```

5. oracle ユーザーのデフォルト・シェルを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
$ echo $SHELL
```

6. テキスト・エディタで `oracle` ユーザーのシェル起動ファイルを開きます。

- Red Hat Enterprise Linux 上の Bash シェルの場合

```
$ vi .bash_profile
```

- Bourne シェル (sh)、Bash シェル (bash) または Korn シェル (ksh) の場合

```
$ vi .profile
```

- C シェル (csh または tcsh) の場合

```
% vi .login
```

7. 次の行を入力または編集して、デフォルトのファイル・モード作成マスクに値 `022` を指定します。

```
umask 022
```

8. ファイル内で `ORACLE_SID`、`ORACLE_HOME` または `ORACLE_BASE` 環境変数が設定されている場合は、ファイルから該当する行を削除します。

9. ファイルを保存してエディタを終了します。

10. シェル起動スクリプトを実行するには、次のいずれかのコマンドを入力します。

- Red Hat Enterprise Linux 上の Bash シェルの場合

```
$ . ~/.bash_profile
```

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ . ~/.profile
```

- C シェルの場合

```
% source ~/.login
```

11. ソフトウェアをローカル・システムにインストールしない場合は、次のコマンドを入力し、X アプリケーションをローカル・システム上に表示するように指示します。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ DISPLAY=local_host:0.0 ; export DISPLAY
```

- C シェルの場合

```
% setenv DISPLAY local_host:0.0
```

この例で、`local_host` は、インストーラの表示に使用するシステム（ワークステーションまたは PC）のホスト名または IP アドレスです。

12. /tmp ディレクトリの空きディスク領域が 400 MB 未満であることが判明した場合は、400 MB 以上の空き領域を持つファイル・システムを識別し、TEMP および TMPDIR 環境変数を設定して、このファイル・システム上の一時ディレクトリを指定します。

- a. `df -k` コマンド（または HP-UX では `bdf` コマンド）を使用して、十分な空き領域がある適切なファイル・システムを識別します。
- b. 必要な場合は、次のようなコマンドを入力して、識別したファイル・システム上に一時ディレクトリを作成し、そのディレクトリに適切な権限を設定します。

```
$ su - root
# mkdir /mount_point/tmp
# chmod a+wr /mount_point/tmp
# exit
```

- c. 次のコマンドを入力して、TEMP および TMPDIR 環境変数を設定します。

- * Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ TEMP=/mount_point/tmp
$ TMPDIR=/mount_point/tmp
$ export TEMP TMPDIR
```

- * C シェルの場合

```
% setenv TEMP /mount_point/tmp
% setenv TMPDIR /mount_point/tmp
```

13. ORACLE_BASE 環境変数を設定するには、次のようなコマンドを入力します。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ ORACLE_BASE=/u01/app/oracle
$ export ORACLE_BASE
```

- C シェルの場合

```
% setenv ORACLE_BASE /u01/app/oracle
```

この例で、/u01/app/oracle は、前に作成または識別した Oracle ベース・ディレクトリです。

14. 次のコマンドを入力して、TNS_ADMIN 環境変数が設定されていないことを確認します。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ unset TNS_ADMIN
```

- C シェルの場合

```
% unsetenv TNS_ADMIN
```

15. 環境が適切に設定されたかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ umask  
$ env | more
```

umask コマンドで値 22、022 または 0022 が表示され、この項で設定した環境変数が正しい値になっていることを確認します。

Oracle HTML DB のインストール前の作業

Oracle HTML DB をインストールする前に、以降の各項のタスクを実行します。

Oracle Database インストールのチェック

Oracle HTML DB をインストールする前に、Oracle HTML DB とともに使用する Oracle データベースを識別します。データベースは、Oracle9i リリース 9.2.0.3 以上である必要があります。インストールする Oracle HTML DB と異なるシステム上にあるデータベースでも可能です。

Oracle XML DB のチェック

使用するデータベースには Oracle XML DB をインストールする必要があります。

インストール時に作成されたか Database Configuration Assistant (DBCA) により作成された事前構成済データベースを使用する場合、Oracle XML DB のインストールと構成はすでに完了しています。Oracle XML DB を既存のデータベースに手動で追加する方法は、『Oracle XML DB 開発者ガイド』を参照してください。

データベース情報の識別

インストール時に、次のデータベース情報を指定する必要があります。

- データベース・システムのホスト名
- Oracle Net Listener のポート番号
- データベースのサービス名
- SYS ユーザーのパスワード

インストールを開始する前に、この情報を確認してください。

ソフトウェアのインストール

この章では、Oracle Universal Installer を起動して、Oracle Database 10g Companion CD に含まれている製品をインストールする方法について説明します。インストールを開始する前に、[第 1 章「インストールの概要」](#)の情報を検討し、[第 2 章「既存の Oracle ホームにインストールする前の作業」](#)または[第 3 章「新規の Oracle ホームにインストールする前の作業」](#)に示した作業を完了してください。この章の内容は、次のとおりです。

- 概要
- [zSeries Linux](#) でのソフトウェアのインストール
- Oracle Database 10g Products のインストール
- 既存の Oracle ホームへの Oracle HTML DB のインストール
- 新規の Oracle ホームへの Oracle Database 10g Companion Products のインストール

概要

Oracle Database 10g Companion CD ソフトウェアはディスク（CD-ROM または DVD-ROM）形式で配布されますが、Oracle Technology Network Japan（OTN-J）の Web サイトからもダウンロードできます。この章では、製品メディアから Oracle Database 10g Companion CD ソフトウェアをインストールする方法について説明します。

Oracle Database 10g Companion CD には、「Oracle Database 10g Products」および「Oracle Database 10g Companion Products」という 2 つのインストール・タイプが含まれています。「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプを選択すると、インストーラにより、このインストール・タイプに含まれる製品がすべてインストールされます。「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプを選択すると、インストールする製品と、新規の Oracle ホームまたは既存の Oracle ホームのどちらにインストールするかを選択できます。インストールする製品に応じて、次の該当する項の指示に従ってください。

- Oracle Database 10g Products のインストール
- 既存の Oracle ホームへの Oracle HTML DB のインストール
- 新規の Oracle ホームへの Oracle Database 10g Companion Products のインストール

zSeries Linux でのソフトウェアのインストール

注意： CD-ROM ドライブまたは DVD-ROM ドライブのあるシステムへのアクセス権限がない場合、Oracle Technology Network Japan（OTN-J）の Web サイトからシステムにインストール・ファイルをコピーできます。

<http://otn.oracle.co.jp/software/index.html>

zSeries システムでは CD-ROM ドライブまたは DVD-ROM ドライブの直接連結がサポートされないため、CD-ROM ドライブまたは DVD-ROM ドライブがサポートされるシステムでは、ディスクからハード・ディスクにインストール・ファイルをコピーする必要があります。

インストール・ファイルをコピーした後、次のいずれかの方法により、zSeries ベース Linux システム上のインストール・ファイルにアクセスできます。

- FTP などを使用して、zSeries ベース Linux システムにインストール・ファイルをコピーします。
- NFS または Samba などの方法を使用して、インストール・ファイルが含まれるファイル・システムを zSeries ベース Linux システムで利用できるようにします。

次の各手順では、次のようなコマンドを使用してインストーラを起動します。

```
$ /directory_path/runInstaller
```

この例では、`directory_path` は、インストール・ファイルをコピーしたローカルまたはネットワークのディレクトリです。

Oracle Database 10g Products のインストール

Oracle Database 10g Products をインストールする手順は、次のとおりです。

1. ディスクをマウントしていない場合は、マウントします。

一部のプラットフォームでは、ディスクをドライブに挿入すると自動的にマウントされます。ディスクが自動的にマウントされない場合は、プラットフォーム固有のマウント方法について、[付録 A](#) を参照してください。

2. 必要の場合は、Oracle ソフトウェア所有者ユーザー（`oracle`）としてログインし、`DISPLAY` 環境変数を設定します。

3. インストーラを起動するには、次のコマンドを入力します。`directory_path` は CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリのパス、または DVD-ROM 上の companion ディレクトリのパスです。

```
$ cd /tmp  
$ /directory_path/runInstaller
```

注意： このリリースのコンポーネントのインストールには、以前のリリースの Oracle Universal Installer を使用しないでください。

4. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックします。
5. 「ファイルの場所の指定」画面で、Oracle Database 10g インストールの Oracle ホーム名およびそのパスが指定されていることを確認して、「次へ」をクリックします。
6. 選択した Oracle ホームに Oracle Real Application Clusters (RAC) がインストールされている場合は、「選択されたノード」画面が表示されます。次へ進むには「次へ」をクリックします。

注意： ソフトウェアは、すべてのクラスタ・ノードにインストールされます。

7. 「インストールする製品の選択」画面で、「**Oracle Database 10g Products**」を選択して「次へ」をクリックします。

このインストール・タイプでインストールされる製品の詳細は、[第 1 章「インストールの概要」](#)を参照してください。

8. インストールを完了するには、インストーラ画面に表示される指示に従います。追加情報が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
9. インストールの完了後に「終了」→「はい」をクリックしてインストーラを終了します。
10. `root.sh` スクリプトを実行するときに、**Legato Single Server Version** をインストールしない場合は、3 を入力してインストールを終了します。

ソフトウェアのインストール後に完了する必要がある作業については、[第 5 章](#)を参照してください。

既存の Oracle ホームへの Oracle HTML DB のインストール

Oracle HTML DB を既存の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする手順は、次のとおりです。

1. ディスクをマウントしていない場合は、マウントします。

一部のプラットフォームでは、ディスクをドライブに挿入すると自動的にマウントされます。ディスクが自動的にマウントされない場合は、プラットフォーム固有のマウント方法について、[付録 A](#)を参照してください。

2. 必要の場合は、Oracle ソフトウェア所有者ユーザー（`oracle`）としてログインし、`DISPLAY` 環境変数を設定します。
3. インストーラを起動するには、次のコマンドを入力します。`directory_path` は CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリのパス、または DVD-ROM 上の companion ディレクトリのパスです。

```
$ cd /tmp
$ /directory_path/runInstaller
```

4. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックします。
5. 「ファイルの場所の指定」画面で、Companion CD からインストールした Oracle HTTP Server を含む既存のインストールの Oracle ホーム名およびそのパスが指定されていることを確認して、「次へ」をクリックします。
6. 「インストールする製品の選択」画面で、「**Oracle Database 10g Companion Products**」を選択します。

7. 「使用可能な製品コンポーネント」画面で、Oracle HTML DB を選択して「次へ」をクリックします。

注意： Oracle HTML DB を既存の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールするため、Oracle HTTP Server は選択しないでください。Oracle HTTP Server は、「使用可能な製品コンポーネント」画面に「**Apache Standalone**」として表示されます。

Oracle HTML DB の詳細は、[第 1 章「インストールの概要」](#)を参照してください。

8. 「HTML DB 構成情報の入力」画面に次の情報を入力して、「次へ」をクリックします。

- **ホスト名**

データベースがインストールされているシステムのホスト名を指定します。

- **ポート**

データベース・システム上の Oracle Net Listener の TCP/IP ポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 1521 です。

- **データベース・サービス名**

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをインストールするデータベースのデータベース・サービス名を指定します。通常、データベース・サービス名は、データベースのグローバル・データベース名（sales.us.oracle.com など）と同じです。

- **SYS パスワード**

データベースの SYS ユーザーのパスワードを指定します。

- **HTML DB パスワード**

HTML DB スキーマ（ユーザー）に使用するパスワードを指定します。HTML DB スキーマ（ユーザー）は、インストール時にデータベース内に作成されます。

インストールが完了すると、このパスワードを使用して、Oracle HTML DB に ADMIN ユーザーとして接続できます。指定したパスワードを HTMLDB_PUBLIC_USER スキーマに使用することもできます。このスキーマは、データベースに接続するために mod_plsql で使用されます。

- **HTML DB パスワードの確認**

正しいパスワードを指定したかどうかを確認するために、パスワードを再入力します。

- **表領域名**

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをロードする表領域の名前を入力するか、デフォルト（SYSAUX）を受け入れます。

9. インストールを完了するには、インストーラ画面に表示される指示に従います。追加情報が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
10. インストールの完了後に「終了」→「はい」をクリックしてインストーラを終了します。
ソフトウェアのインストール後に完了する必要がある作業については、[第 5 章](#)を参照してください。

新規の Oracle ホームへの Oracle Database 10g Companion Products のインストール

Oracle Database 10g Companion Products を新規の Oracle ホームにインストールする手順は、次のとおりです。

1. ディスクをマウントしていない場合は、マウントします。
一部のプラットフォームでは、ディスクをドライブに挿入すると自動的にマウントされます。ディスクが自動的にマウントされない場合は、プラットフォーム固有のマウント方法について、[付録 A](#)を参照してください。
2. 必要の場合は、Oracle ソフトウェア所有者ユーザー（oracle）としてログインし、DISPLAY 環境変数を設定します。
3. インストーラを起動するには、次のコマンドを入力します。directory_path は CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリのパス、または DVD-ROM 上の companion ディレクトリのパスです。

```
$ cd /tmp  
$ /directory_path/runInstaller
```
4. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックします。
5. このシステムへの Oracle 製品の初回インストールの場合は、「インベントリ・ディレクトリおよび接続情報の指定」画面が表示されます。次の情報を指定して「次へ」をクリックします。

- インベントリおよびディレクトリのフルパスの入力

次のようなパスを入力したことを確認します。oracle_base は、ORACLE_BASE 環境変数に指定した値です。

```
oracle_base/oraInventory
```

- オペレーティング・システム・グループ名の指定

Oracle インベントリ・グループを指定したことを確認します。

```
oinstall
```

6. プロンプトが表示されたら、root ユーザーとして別の端末ウィンドウで次のスクリプトを実行します。

```
oracle_base/oraInventory/orainstRoot.sh
```

7. 「ファイルの場所の指定」画面で、次のような新規の Oracle ホーム・ディレクトリの名前とパスを入力します。

フィールド	サンプル値
名前	OraDb10g_Home2
パス	oracle_base/product/10.1.0/companion_1

8. Cluster Ready Services (CRS) または Oracle Real Application Clusters (RAC) がシステムにインストールされている場合は、「ハードウェアのクラスタ・インストール・モードの指定」画面が表示されます。インストール・ノードのみにソフトウェアをインストールするには、「ローカル・インストール」を選択して、「次へ」をクリックします。

注意： 必要に応じて、クラスタのノードごとに個別にソフトウェアをインストールする必要があります。

9. 「インストールする製品の選択」画面で、「Oracle Database 10g Companion Products」を選択して「次へ」をクリックします。
10. 「使用可能な製品コンポーネント」画面で、インストールする製品を選択します。「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプでインストールされる製品の詳細は、第 1 章「インストールの概要」を参照してください。

注意： Oracle HTML DB を新規の Oracle ホームにインストールする場合は、Oracle HTTP Server を選択する必要があります。Oracle HTTP Server は、「使用可能な製品コンポーネント」画面に「Apache Standalone」として表示されます。

11. 「**Oracle HTML DB**」を選択した場合は、「HTML DB 構成情報の入力」画面に次の情報を入力して、「**次へ**」をクリックします。

■ **ホスト名**

データベースがインストールされているシステムのホスト名を指定します。

■ **ポート**

データベース・システム上の Oracle Net Listener の TCP/IP ポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 1521 です。

■ **データベース・サービス名**

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをインストールするデータベースのデータベース・サービス名を指定します。通常、データベース・サービス名は、データベースのグローバル・データベース名 (sales.us.oracle.com など) と同じです。

■ **SYS パスワード**

データベースの SYS ユーザーのパスワードを指定します。

■ **HTML DB パスワード**

HTML DB スキーマ (ユーザー) に使用するパスワードを指定します。HTML DB スキーマ (ユーザー) は、インストール時にデータベース内に作成されます。

インストールが完了すると、このパスワードを使用して、Oracle HTML DB に ADMIN ユーザーとして接続できます。指定したパスワードを HTMLDB_PUBLIC_USER スキーマに使用することもできます。このスキーマは、データベースに接続するために mod_plsql で使用されます。

■ **HTML DB パスワードの確認**

正しいパスワードを指定したかどうかを確認するために、パスワードを再入力します。

■ **表領域名**

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをロードする表領域の名前を入力するか、デフォルト (SYSAUX) を受け入れます。

12. Tru64 UNIX システムの場合のみ、「JDK Home Directory」画面で Java Development Kit (JDK) 1.4.2 のホーム・ディレクトリのフルパスを指定して、「次へ」をクリックします。

Java JDK 1.4.2 がインストールされているかどうかを判別するには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/setld -i JAVA142 | more
```

Java JDK 1.4.2 がインストールされている場合、このコマンドは、インストールされている全ファイルへのパスをすべて表示します。Java ホーム・ディレクトリのパスをメモして、「JDK Home Directory」画面に入力します。デフォルトのパスは次のとおりです。

```
/usr/opt/java142
```

13. インストールを完了するには、インストーラ画面に表示される指示に従います。追加情報が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。
14. プロンプトが表示されたら、root ユーザーとして別の端末ウィンドウで次のスクリプトを実行します。

```
oracle_home/root.sh
```

スクリプトが完了したら、「OK」をクリックします。

15. インストールの終了画面で、Oracle HTTP Server で使用される URL をメモします。

注意： これらの URL は、次のファイルにも示されます。

- Solaris x86 の場合

```
$ORACLE_HOME/install/setupinfo.txt
```

- 他のオペレーティング・システムの場合

```
$ORACLE_HOME/Apache/Apache/setupinfo.txt
```

16. 「終了」→「はい」をクリックしてインストーラを終了します。
17. ソフトウェアのインストール後に完了する必要がある作業については、[第 5 章](#)を参照してください。

インストール後の作業

この章では、ソフトウェアのインストール後に完了する必要がある作業について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- [Oracle HTTP Server のインストール後の作業](#)
- [Oracle HTML DB のインストール後の作業](#)
- [Legato Single Server Version のインストール後の作業](#)

Oracle HTTP Server のインストール後の作業

Oracle HTTP Server をインストールした場合は、次の項で説明する作業を完了してください。

root.sh スクリプトのバックアップ作成

インストールの完了後に、root.sh スクリプトのバックアップを作成することをお勧めします。他の製品を同じ Oracle ホーム・ディレクトリにインストールすると、Oracle Universal Installer によりインストール中に既存の root.sh スクリプトの内容が更新されます。オリジナルの root.sh スクリプトに含まれていた情報が必要になった場合は、バックアップの root.sh ファイルからリカバリできます。

以前のリリースの Oracle HTTP Server からの移行

注意： この項の内容は、HP-UX Itanium システム、Linux Itanium システムまたは Solaris x86 システムには適用されません。

Itanium システムでは、Oracle HTTP Server のバージョンは Oracle9i リリース 2 (9.2) に付属するバージョンと同じです。Itanium システムにソフトウェアをインストールする場合は、5-12 ページの「[Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動](#)」を参照してください。

この項では、Oracle Application Server の一部としてインストールされたリリースの Oracle HTTP Server から移行する方法については説明しません。この種の移行はサポートされません。

このシステム上で、以前のリリースの Oracle Server とともにインストールされた Oracle HTTP Server を使用している場合は、その HTTP Server の構成を現行のリリースに移行できます。

移行作業は、次の項で説明するように 2 つの部分にわかれています。

- [httpd.conf ファイルの移行](#)
- [mod_plsql で使用されるデータベース・アクセス記述子の移行](#)

httpd.conf ファイルの移行

以前のリリースの Oracle HTTP Server の構成を現行リリースに移行するには、そのリリースで使用されている httpd.conf ファイルをコピーして変更する必要があります。次の各項では、このタスクの実行方法について説明します。

httpd.conf ファイルのコピーと編集

以前のリリースで使用されている httpd.conf ファイルを、現行リリースの構成ファイル・ディレクトリにコピーします。

1. ユーザーを Oracle ソフトウェア所有者ユーザー（通常は oracle）に切り替えます。

```
$ su - oracle
```

2. ORACLE_HOME 環境変数を設定して、現行リリースの Oracle ホーム・ディレクトリへのパスを指定します。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ ORACLE_HOME=new_oracle_home_path ; export ORACLE_HOME
```

- C シェルの場合

```
% setenv ORACLE_HOME new_oracle_home_path
```

3. 現行リリースの Oracle HTTP Server に使用する構成ファイル・ディレクトリのバックアップを作成します。

```
$ cp $ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf $ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf.orig
```

4. 構成ファイル・ディレクトリに移動します。

```
$ cd $ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf
```

5. 以前のリリースで使用されている httpd.conf ファイルを、現行のディレクトリにコピーします。次に例を示します。

```
$ cp /old_oracle_home/Apache/Apache/conf/httpd.conf .
```

6. テキスト・エディタで httpd.conf ファイルを開きます。

一括変更の実行

httpd.conf ファイルに対して次の一括変更を実行します。

1. 以前のリリースの Oracle ホーム・ディレクトリ・パスの出現箇所をすべて検索し、
現行の Oracle ホーム・ディレクトリ・パスに置き換えます。
2. mod_ssl.c の出現箇所をすべて mod_oss1.c に変更します。

注意： 現在 SSL を使用していない場合にも、httpd.conf ファイル内の
SSL 関連ディレクティブを変更することをお勧めします。

LoadModule のディレクティブ・リストの変更

LoadModule のディレクティブ・リストを変更する手順は、次のとおりです。

1. 次のディレクティブを削除します。

```
LoadModule opocmgr_module      libexec/libopocmgr.so
LoadModule rewrite_module      libexec/mod_rewrite.so
```

注意： このファイルには、後で mod_rewrite モジュール用の
LoadModule ディレクティブを追加する必要があります。

2. onsint モジュールをロードする次のディレクティブを、<IfDefine SSL> セクションの直前に追加します。

```
LoadModule onsint_module      libexec/mod_onsint.so
```

3. <IfDefine SSL> セクションの LoadModule ディレクティブ内で、次のように
ssl_module を oss1_module に変更し、mod_ssl.so を mod_oss1.so に変更しま
す。

```
LoadModule oss1_module      libexec/mod_oss1.so
```

サポートされない機能に関するディレクティブとセクションの削除

サポートされない機能に関するディレクティブとセクションをすべて削除する手順は、次のとおりです。

1. <IfModule mod_alias.c> セクションから次のディレクティブを削除します。

```
Alias /jservdocs/ "oracle_home/Apache/Jserv/docs/"
Alias /soapdocs/ "oracle_home/soap/"
```

2. 次のインクルード・ディレクティブを削除します。

```
include "/oracle_home/Apache/Jserv/etc/jserv.conf"
```

3. <IfModule mod_opocmgr.c> セクションを削除します。

ポート番号の変更

Oracle Server とともにインストールされていた以前のリリースの Oracle HTTP Server で使用されている `httpd.conf` ファイルでは、SSL 対応サーバーを起動したかどうかに応じて非 SSL (HTTP) リクエスト用に異なるポートが指定されています。次の例では、これらのポートが `port1` および `port2` として示されています。

```
Port port1
Listen port1

<IfModule mod_ssl.c>
    Port port2
    Listen port2
    Listen SSL_port
</IfModule>
```

これらのディレクティブを次のように変更することをお勧めします。

1. SSL を使用していなかった場合は、次のディレクティブを削除します。

```
Port port2
Listen port2
```

Oracle HTTP Server は HTTP リクエストをポート `port1` でリスニングするようになります。

2. SSL 用に定義されたポートのみを使用していた場合は、各ディレクティブを次の例に示すように変更します。

```
Port port2
Listen port2

<IfModule mod_ssl.c>
    Listen SSL_port
</IfModule>
```

Oracle HTTP Server は HTTP リクエストをポート `port2`、HTTPS リクエストをポート `SSL_port` でリスニングするようになります。

3. 以前のリリースの Oracle HTTP Server をこのリリースと同時に使用し続ける場合は、`Port` および `Listen` ディレクティブに指定されているポートを未使用のポートに変更します。
4. 前述の手順で `SSL_port` を変更した場合は、次の手順を実行します。
 - a. `<VirtualHost _default_:SSL_port>` ディレクティブを検索し、`SSL_port` の値が `<IfModule mod_ssl.c>` セクションの `Listen` ディレクティブに指定されている値と一致することを確認します。
 - b. `<VirtualHost _default_:SSL_port>` セクションで、`Port` ディレクティブに指定されているポート番号が `SSL_port` と同じであることを確認します。

User ディレクティブと Group ディレクティブの値の確認

必要な場合は、User ディレクティブと Group ディレクティブに指定されている値を次の手順で変更します。

- User ディレクティブでは、Oracle HTTP Server のインストールに使用した Oracle ソフトウェア所有者ユーザーのユーザー名を指定する必要があります。デフォルト値は `oracle` です。
- Group ディレクティブでは、このシステム上の Oracle インベントリ・グループの名前を指定する必要があります。デフォルト値は `oinstall` です。

既存のセクションとディレクティブの変更

次のセクションとディレクティブを変更します。

1. デフォルト・ディレクトリのセクション `<Directory />` で、Options ディレクティブに `MultiViews` オプションを追加します。次に例を示します。

```
<Directory />
    Options FollowSymLinks MultiViews
    AllowOverride None
</Directory>
```

2. `<IfModule mod_alias.c>` セクションに新しい `<IfModule mod_perl.c>` セクションを作成し、このセクションに `/perl/` の別名を定義する `Alias` ディレクティブを移動します。次に例を示します。

```
<IfModule mod_alias.c>
...
    <IfModule mod_perl.c>
        Alias /perl/ "/oracle_home/Apache/Apache/cgi-bin/"
    </IfModule>
...
</IfModule>
```

3. `<IfModule mod_dms.c>` セクションを次の例のように変更します。`hostname` および `domain` 変数を適切な値に置き換えます。

```
<IfModule mod_dms.c>
    <Location /dms0>
        SetHandler dms-handler
        Order deny,allow
        Deny from all
        Allow from localhost hostname.domain hostname
    </Location>
</IfModule>
```

4. PERL5LIB 環境変数を設定するディレクティブで、Perl ディレクトリの位置とバージョンを次の例に示すように編集します。

```
SetEnv PERL5LIB "/oracle_home/perl/lib/5.6.1:/oracle_home/perl/lib/site_perl/5.6.1"
```

新規のセクションとディレクティブの追加

ファイルに次の新規セクションと新規ディレクティブを追加します。

1. 次のセクションを追加して WEB-INF ディレクトリを保護します。

```
#Protect WEB-INF directory

<DirectoryMatch /WEB-INF/>
    Order deny,allow
    Deny from all
</DirectoryMatch>
```

2. oracle_apache.conf ファイルをインクルードする行の前に次の数行を挿入します。

```
# Include the configuration files needed for mod_oc4j
include "/oracle_home/Apache/Apache/conf/mod_oc4j.conf"

# Loading mod_rewrite module here as it has to load before mod_oc4j
LoadModule rewrite_module      libexec/mod_rewrite.so
```

サーバー証明書と秘密鍵の移行

SSL を使用しており、既存のサーバー証明書と秘密鍵がある場合は、それをこのリリースの Oracle HTTP Server で使用する前に、mod_ossll に必要な書式に移行する必要があります。既存のサーバー証明書と秘密鍵を移行する手順は、次のとおりです。

1. 次のようなコマンドを別の端末ウィンドウに入力します。

```
$ /new_oracle_home/Apache/Apache/bin/ssl2ossll -cert cert_file \
        -key key_file \
        {[ -chain chain_file] |
        [ -cafile CA_file] |
        [ -capath CA_path] }\
        -wallet wallet_path \
        [ -certpass key_file_pwd] \
        [ -wltpass wallet_pwd] \
        [ -ssowallet yes] \
        [ -validate yes]
```

次の表に、このコマンドで使用可能な各オプションの推奨値を示します。

注意： オプション -chain、-cafile、-capath から 1 つ以上を指定する必要があります。

オプション	推奨値
-cert	以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCertificateFile ディレクティブに指定されていた値を使用します。
-key	以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCertificateKeyFile ディレクティブに指定されていた値を使用します。
-chain	以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCertificateChainFile ディレクティブの前にコメント文字 (#) が付いていない場合は、そのディレクティブに指定されていた値を使用します。 注意: SSLCertificateChainFile ディレクティブが指定されていない場合、またはコメント文字で始まっていない場合は、-chain オプションを指定しないでください。
-cafile	以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCACertificateFile ディレクティブの前にコメント文字 (#) が付いていない場合は、そのディレクティブに指定されていた値を使用します。 注意: SSLCACertificateFile ディレクティブが指定されていない場合、またはコメント文字で始まっていない場合は、-cafile オプションを指定しないでください。
-capath	以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCACertificatePath ディレクティブの前にコメント文字 (#) が付いていない場合は、そのディレクティブに指定されていた値を使用します。 注意: SSLCACertificatePath ディレクティブが指定されていない場合、またはコメント文字で始まっていない場合は、-capath オプションを指定しないでください。
-wallet	Wallet を作成するディレクトリへのパスを指定します。デフォルト値は次のとおりです。 /new_oracle_home/Apache/Apache/conf/ssl.wlt/default
-certpass	秘密鍵ファイルが暗号化されている場合は、そのパスワードを指定します。
-wltpass	新規 Wallet のパスワードを指定します。 このオプションを指定しないと、ssl2oss1 ユーティリティでは Wallet パスワードの入力と確認を求めるプロンプトが表示されます。
-ssowallet	Oracle Single Sign-On と互換性のある Wallet を作成するには、値 yes を指定します。
-validate	Wallet が正常に変換されるかどうかを検証するには、値 yes を指定します。このオプションに値 yes を指定すると、Wallet は作成されません。

2. オプションで、次のようなコマンドを入力し、`ssl2oss1` コマンドに指定した `Wallet` パスワードの暗号化バージョンを生成できます。

注意： `ssl2oss1` コマンドで `-ssowallet` オプションを指定した場合、この手順を実行する必要はありません。それ以外の場合は、`httpd.conf` ファイルでパスワードを指定する必要があるため、パスワードは暗号化することをお勧めします。

```
$ /oracle_home/Apache/Apache/bin/iasobf -p wallet_pwd
```

このコマンドの出力は、`-p` オプションに指定したパスワードの暗号化バージョンです。次の項では、この値を `SSLWalletPassword` ディレクティブに対して指定する必要があります。

SSL セクションとディレクティブの変更

注意： 現在 SSL を使用していない場合にも、`httpd.conf` ファイル内の SSL 関連セクションおよびディレクティブを変更することをお勧めします。

<IfModule mod_oss1.c> セクションの各ディレクティブを次のように変更します。

1. `SSLSessionCache` ディレクティブの設定を次のように変更します。

```
SSLSessionCache shmcb:/oracle_home/Apache/Apache/logs/ssl_scache(512000)
```

2. `SSLCipherSuite` ディレクティブの設定を次のように変更します。

```
SSLCipherSuite SSL_RSA_WITH_RC4_128_MD5:SSL_RSA_WITH_RC4_128_SHA:
SSL_RSA_WITH_3DES_EDE_CBC_SHA:SSL_RSA_WITH_DES_CBC_SHA:
SSL_RSA_EXPORT_WITH_RC4_40_MD5:SSL_RSA_EXPORT_WITH_DES40_CBC_SHA
```

3. 次のディレクティブとその関連コメントを削除します。

```
SSLRandomSeed
SSLCertificateFile
SSLCertificateKeyFile
SSLCertificateChainFile
SSLCACertificateFile
SSLCACertificatePath
SSLVerifyDepth
```

4. <VirtualHost _default_:SSL_port> セクションに、次の行を追加します。

```
# Server Wallet:
# The server wallet contains the server's certificate, private key
# and trusted certificates. Set SSLWallet at the wallet directory
# using the syntax: file:<path-to-wallet-directory>
SSLWallet file:/oracle_home/Apache/Apache/conf/ssl.wlt/default

# Server Wallet Password:
# Both clear text wallet password and obfuscated password are allowed
# here. An obfuscated one is recommended.
# Examples:
# SSLWalletPassword <clear_pass>
# SSLWalletPassword <obfuscated_pass>
#SSLWalletPassword ...
```

5. サーバー証明書と秘密鍵を移行した場合は、次の手順を実行します。
- SSLWallet ディレクティブにデフォルト以外の値が指定されている場合は、それを変更して Wallet のパスを指定します。
 - Oracle Single Sign-On と互換性のある Wallet を（前項で `-ssowallet yes` オプションを使用して）作成していない場合は、SSLWalletPassword ディレクティブからコメントを削除し、値としてクリアテキストまたは暗号化形式の Wallet パスワードを指定します。

新規ディレクトリへの必須ファイルのコピー

ファイル用のスクリプトを、ドキュメント・ルート・ディレクトリおよびスクリプト・ディレクトリから、新規リリース用の同等のディレクトリにコピー（または移動）します。該当する場合は次のファイルをコピーします。

注意： 以前のリリースの Oracle ホーム・ディレクトリのうち、サブディレクトリにあるファイルのみをコピーする必要があります。他の位置にある別名ディレクトリには、そのディレクトリと内容に対するアクセス権でサーバーによる読取りが許可されている場合に、引き続きアクセスできます。User または Group ディレクティブを変更した場合は、これらのアクセス権の変更が必要になることがあります。

- DocumentRoot または Alias ディレクティブに指定されているディレクトリ内のファイルとサブディレクトリ
- ScriptAlias ディレクティブに指定されているディレクトリにある CGI、Perl、FastCGI の各プログラム、スクリプトおよびその関連ファイル

mod_plsql で使用されるデータベース・アクセス記述子の移行

以前のリリースの Oracle HTTP Server を含むデータベースへのアクセスに mod_plsql を使用していた場合は、データベース・アクセス記述子（DAD）を現行リリースの mod_plsql で必要な書式に移行する必要があります。dadTool.pl Perl スクリプトを使用すると、この移行タスクを完了できます。このスクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. 必要な場合は、ユーザーを Oracle ソフトウェア所有者ユーザー（通常は oracle）に切り替えます。

```
$ su - oracle
```

2. ORACLE_HOME 環境変数を設定して現行リリース用の Oracle ホーム・ディレクトリへのパスを指定し、PATH 環境変数を設定して perl 実行可能ファイルを含むディレクトリを組み込みます。

■ Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ ORACLE_HOME=new_oracle_home_path
$ PATH=${ORACLE_HOME}/perl/bin:${PATH}
$ PATH=${ORACLE_HOME}/Apache/modplsql/conf:${PATH}
$ export ORACLE_HOME PATH
```

■ C シェルの場合

```
% setenv ORACLE_HOME new_oracle_home_path
% setenv PATH ${ORACLE_HOME}/perl/bin:${PATH}
% setenv PATH ${ORACLE_HOME}/Apache/modplsql/conf:${PATH}
```

3. プラットフォームに該当する共有ライブラリ・パス環境変数を設定し、\$ORACLE_HOME/lib ディレクトリを組み込みます。次の表は、各プラットフォームの適切な環境変数を示しています。

プラットフォーム	環境変数
AIX	LIBPATH
HP-UX	SHLIB_PATH
Linux、Solaris および Tru64 UNIX	LD_LIBRARY_PATH

たとえば、HP-UX システムの Bourne シェルで SHLIB_PATH 環境変数を設定するには、次のコマンドを入力します。

```
$ SHLIB_PATH=$ORACLE_HOME/lib:${SHLIB_PATH}; export SHLIB_PATH
```

4. 現行リリースの Oracle HTTP Server に使用する `mod_plsql` 構成ディレクトリに移動します。

```
$ cd $ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf
```

5. 以前のリリースで使用されていた DAD 構成ファイル (`wdbsvr.app`) を、このディレクトリにコピーします。

```
$ cp /old_oracle_home/Apache/modplsql/cfg/wdbsvr.app .
```

6. 次のコマンドを入力してスクリプトを実行します。

```
$ perl dadTool.pl -m
```

このスクリプトは、`wdbsvr.app` ファイルから DAD 情報を読み取って、`dads.conf` ファイルに新しい等価の DAD を作成します。

Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動

次の各項では、Oracle HTTP Server を起動、停止および再起動する方法について説明します。

- [HP-UX Itanium、Linux Itanium、Solaris x86 および zSeries Linux での Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動](#)
- [その他のプラットフォームでの Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動](#)

HP-UX Itanium、Linux Itanium、Solaris x86 および zSeries Linux での Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動

注意： HP-UX Itanium システム、Linux Itanium システム、Solaris x86 システムおよび zSeries Linux システムの場合のみ、Oracle HTTP Server の起動と停止について、`apachectl` スクリプトがサポートされています。

Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動には、`apachectl` スクリプトを使用します。

```
$ $ORACLE_HOME/Apache/Apache/bin/apachectl { start | startssl | stop | restart |  
restartssl }
```

その他のプラットフォームでの Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動

Oracle HTTP Server とともに Oracle Process Manager and Notification サーバー (OPMN) を使用する必要があります。OPMN を使用するには、最初に OPMN デーモンを起動します。OPMN デーモンと Oracle HTTP Server プロセスを一緒に起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ $ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall
```

OPMN デーモンの実行中は、次のコマンドを入力して Oracle HTTP Server を起動、停止または再起動できます。

- Oracle HTTP Server のみを起動する場合は、次のように入力します。

```
$ $ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startproc ias-component=HTTP_Server
```
- Oracle HTTP Server のみを停止する場合は、次のように入力します。

```
$ $ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
```
- Oracle HTTP Server のみを再起動する場合は、次のように入力します。

```
$ $ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

OPMN デーモンと Oracle HTTP Server プロセスを停止するには、次のコマンドを入力します。

```
$ $ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall
```

Oracle HTML DB のインストール後の作業

Oracle HTML DB をインストールした場合は、次の項で説明する作業を完了してください。

HP-UX Itanium および Linux Itanium の場合のみ : Oracle HTML DB の DAD の構成

Oracle HTML DB がデータベースにアクセスできるようにするには、次の手順でデータベース・アクセス記述子 (DAD) を構成する必要があります。

1. テキスト・エディタを使用して、`Apache/modplsql/conf/marvel.conf` ファイルを編集し、1 行目を除くすべての行を削除します。
2. Web ブラウザで Oracle HTTP Server のホーム・ページにアクセスします。
`http://hostname:port/`
3. **Mod_plsql 構成のメニュー**を選択します。
4. **ゲートウェイのデータベース・アクセス記述子の設定**を選択します。
5. **デフォルトの追加**を選択します。
6. データベース・アクセス記述子のページで、次の表にリストされたフィールドに値を入力します。

注意： 表にリストされたフィールドにのみ値を入力してください。

フィールド	値
データベース・アクセス記述子の名前	htmldb
Oracle ユーザー名	HTMLDB_PUBLIC_USER
Oracle パスワード	インストール時に HTML DB に指定されたパスワード
Oracle 接続文字列	HTML DB オブジェクトがインストールされたデータベースの接続文字列。書式は次のとおりです。 <code>host:port:service_name</code>
接続プーリング使用の不可	いいえ
デフォルト (ホーム) ページ	htmldb
ドキュメント表	WWW_FLOW_FILE_OBJECTS\$
ドキュメント・アクセス・パス	docs
ドキュメント・アクセス手順	WWW_FLOW_FILE_MANAGER.PROCESS_DOWNLOAD

Oracle HTTP Server の再起動

注意： HP-UX Itanium システム、Linux Itanium システム、Solaris x86 システムおよび zSeries Linux システムでは、Oracle HTML DB のインストールをすべて完了した後、Oracle HTTP Server を再起動する必要があります。

Oracle HTML DB を既存の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールした場合は、アクセスする前に Oracle HTTP Server を再起動する必要があります。Oracle HTTP Server を再起動するには、次のコマンドを入力します。

- HP-UX Itanium、Linux Itanium、Solaris x86 または zSeries Linux の場合

```
$ $ORACLE_HOME/Apache/Apache/bin/apachectl restart
```
- 他のオペレーティング・システムの場合

```
$ $ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

インストールの検証

インストールを検証するには、Web ブラウザで Oracle HTML DB の管理ページを開きます。タスクを完了する手順は、次のとおりです。

注意： Oracle HTML DB アプリケーションを表示または開発するには、Web ブラウザで JavaScript と HTML 4.0 および CSS 1.0 規格がサポートされている必要があります。この要件を満たしているブラウザは、次のとおりです。

- Netscape Communicator 7.0 以上
 - Microsoft Internet Explorer 5.5 以上
 - Mozilla 1.2 以上
-

1. Web ブラウザで次の URL を開きます。

```
http://hostname:port/pls/htmldb/htmldb_admin
```

各項目の意味は次のとおりです。

- `hostname` は、Oracle HTTP Server のホスト名です。
- `port` は、Oracle HTTP Server のポートです。

2. ユーザー名 ADMIN とインストール時に指定したパスワードを使用して、Oracle HTML DB にログインします。

関連項目： Oracle HTML DB の使用、アプリケーション開発への使用、および管理の詳細は、オンライン・ヘルプおよび『Oracle HTML DB ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Legato Single Server Version のインストール後の作業

注意： Legato Single Server Version は、Solaris x86 システムにはインストールされていません。

LSSV リリース 6.1 をインストールした後、Oracle データ記憶域を管理するために Legato Single Server Version ソフトウェアを構成、管理および使用する方法については、『Legato Single Server Version Administrator's Guide』およびプログラムのオンライン・ヘルプを参照してください。

Oracle ソフトウェアの削除

この章では、システムから Oracle ソフトウェアを削除する方法について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- [Oracle ソフトウェア・ファイルの削除](#)
- [Oracle HTML DB データベース・オブジェクトの削除](#)

Oracle ソフトウェア・ファイルの削除

インストーラを使用して Oracle ソフトウェアを削除する手順は、次のとおりです。

注意： Oracle ソフトウェアの削除には、必ず Oracle Universal Installer を使用します。インストーラを使用して先にソフトウェアを削除してから、Oracle ホーム・ディレクトリを削除してください。

1. 必要に応じて、oracle ユーザーとしてログインします。

```
$ su - oracle
```

2. ORACLE_HOME 環境変数を設定して、削除する Oracle ホーム・ディレクトリへのパスを指定します。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ ORACLE_HOME=oracle_home_path  
$ export ORACLE_HOME
```

- C シェルの場合

```
$ setenv ORACLE_HOME oracle_home_path
```

3. 次のように入力してインストーラを起動します。

```
$ $ORACLE_HOME/oui/bin/runInstaller
```

4. 「ようこそ」画面で「**製品の削除**」をクリックします。

「インベントリ」画面が表示され、システム上のすべての Oracle ホームと各 Oracle ホームにインストールされている製品が表示されます。

5. 「インベントリ」画面で、削除する Oracle ホームと製品を選択します。
6. 特定の製品を削除する場合は、その製品をツリー・ウィンドウから選択します。
7. 「削除」をクリックします。

製品および依存コンポーネントの削除を確認する確認画面が表示されます。

8. 「はい」をクリックします。

ソフトウェアの削除中には処理の進捗を示すインジケータが表示されます。

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトの削除

Oracle HTML DB をインストールすると、Configuration Assistant により、インストール時に指定したデータベースにデータベース・オブジェクトが作成されます。Oracle HTML DB を完全に削除するには、ソフトウェアを削除した後、そのデータベースからデータベース・オブジェクトを削除する必要があります。データベースから Oracle HTML DB データベース・オブジェクトを削除する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を使用して、次のように SYS または SYSTEM ユーザーとしてデータベースに接続します。

```
$ sqlplus "SYS/SYS_password AS SYSDBA"
```

2. 次のコマンドを入力して、データベース・オブジェクトを削除します。

```
SQL> ALTER SESSION SET CURRENT_SCHEMA = flows_010500;  
SQL> EXEC wwv_flow_upgrade.drop_public_synonyms;  
SQL> ALTER SESSION SET CURRENT_SCHEMA = SYSTEM;  
SQL> DROP USER flows_010500 CASCADE;  
SQL> DROP USER flows_files CASCADE;  
SQL> DROP USER htmldb_public_user CASCADE;
```

ディスクのマウント

この Oracle 製品は、CD-ROM および DVD-ROM で提供されます。ディスクは、Rockridge 拡張形式の ISO 9660 フォーマットになっています。この付録では、サポートされている各プラットフォーム上でディスクをマウントおよびアンマウントする方法について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- A-2 ページ [「AIX でのディスクのマウント」](#)
- A-3 ページ [「HP-UX でのディスクのマウント」](#)
- A-4 ページ [「Linux でのディスクのマウント」](#)
- A-5 ページ [「Solaris でのディスクのマウント」](#)
- A-6 ページ [「Tru64 UNIX でのディスクのマウント」](#)

AIX でのディスクのマウント

ディスクをマウントする手順は、次のとおりです。

1. ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
```

2. 必要場合は、次のようなコマンドを入力し、現在マウントされているディスクをアンマウントしてドライブから取り出します。

```
# umount /cdrom
```

この例では、/cdrom はディスク・ドライブのマウント・ポイント・ディレクトリです。

3. 適切なディスクをドライブに挿入し、次のようなコマンドを入力してマウントします。

```
# /usr/sbin/mount -rv cdrfs /dev/cd0 /cdrom
```

この例では、/dev/cd0 はディスク・ドライブのデバイス名、/cdrom はマウント・ポイント・ディレクトリです。

4. インストーラで「ディスクの場所」ダイアログ・ボックスが表示される場合は、次のようにディスク・マウント・ポイント・ディレクトリのパスを入力します。

```
/cdrom
```

操作を続けるには、次の該当する項に進んでください。

- 4-3 ページ [「Oracle Database 10g Products のインストール」](#)
- 4-4 ページ [「既存の Oracle ホームへの Oracle HTML DB のインストール」](#)
- 4-6 ページ [「新規の Oracle ホームへの Oracle Database 10g Companion Products のインストール」](#)

HP-UX でのディスクのマウント

ディスクをマウントする手順は、次のとおりです。

1. ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
```

2. 必要な場合は、次のコマンドを入力し、現在マウントされているディスクをアンマウントしてドライブから取り出します。

```
# /usr/sbin/umount /SD_CDROM
```

この例では、/SD_CDROM はディスク・ドライブのマウント・ポイント・ディレクトリです。

3. 適切なディスクをディスク・ドライブに挿入し、次のようなコマンドを入力してマウントします。

```
# /usr/sbin/mount -F cdfs -o rr /dev/dsk/cxydz /SD_CDROM
```

この例で、/SD_CDROM はディスク・マウント・ポイント・ディレクトリ、/dev/dsk/cxydz はディスク・デバイスのデバイス名 (/dev/dsk/c0t2d0 など) です。

4. インストーラで「ディスクの場所」ダイアログ・ボックスが表示される場合は、次のようにディスク・マウント・ポイント・ディレクトリのパスを入力します。

```
/SD_CDROM
```

操作を続けるには、次の該当する項に進んでください。

- 4-3 ページ [「Oracle Database 10g Products のインストール」](#)
- 4-4 ページ [「既存の Oracle ホームへの Oracle HTML DB のインストール」](#)
- 4-6 ページ [「新規の Oracle ホームへの Oracle Database 10g Companion Products のインストール」](#)

Linux でのディスクのマウント

ほとんどの Linux システムでは、ディスクをディスク・ドライブに挿入すると自動的にマウントされます。ディスクが自動的にマウントされない場合は、次の手順でマウントします。

1. ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
```

2. 必要場合は、次のいずれかのコマンドを入力し、現在マウントされているディスクをドライブから取り出します。

- Red Hat の場合

```
# eject /mnt/cdrom
```

- SUSE の場合

```
# eject /media/cdrom
```

この例では、/mnt/cdrom および /cdrom はディスク・ドライブのマウント・ポイント・ディレクトリです。

3. 適切なディスクをディスク・ドライブに挿入します。
4. ディスクが自動的にマウントされたかどうかを確認するには、プラットフォームに応じて次のいずれかのコマンドを入力します。

- Red Hat の場合

```
# ls /mnt/cdrom
```

- SUSE の場合

```
# ls /media/cdrom
```

5. 手順 4 のコマンドでディスクの内容が表示されない場合は、プラットフォームに応じて次のようなコマンドを入力してマウントします。

- Red Hat の場合

```
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /mnt/cdrom
```

- SUSE の場合

```
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /media/cdrom
```

この例では、/mnt/cdrom および /media/cdrom は、それぞれ Red Hat および SUSE 上のディスク・ドライブのデフォルトのマウント・ポイント・ディレクトリです。

6. インストーラで「ディスクの場所」ダイアログ・ボックスが表示される場合は、次のようにディスク・マウント・ポイント・ディレクトリのパスを入力します。

```
/mnt/cdrom
```

操作を続けるには、次の該当する項に進んでください。

- 4-3 ページ「[Oracle Database 10g Products のインストール](#)」
- 4-4 ページ「[既存の Oracle ホームへの Oracle HTML DB のインストール](#)」
- 4-6 ページ「[新規の Oracle ホームへの Oracle Database 10g Companion Products のインストール](#)」

Solaris でのディスクのマウント

ほとんどの Solaris システムでは、ディスクをディスク・ドライブに挿入すると自動的にマウントされます。ディスクが自動的にマウントされない場合は、次の手順でマウントします。

1. ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
```

2. 必要な場合は、次のコマンドを入力して現在マウントされているディスクをドライブから取り出します。

```
# eject
```

3. 適切なディスクをドライブに挿入します。

4. ディスクが自動的にマウントされたかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# ls /cdrom/cdrom0
```

5. このコマンドでディスクの内容が表示されない場合は、次のコマンドを入力してディスクをマウントします。

```
# /usr/sbin/mount -r -F hsfs /dev/dsk/cxydzs2 /cdrom
```

この例で、/cdrom はディスク・マウント・ポイント・ディレクトリ、
/dev/dsk/cxydzs2 はディスク・デバイスのデバイス名（/dev/dsk/c0t2d0s2 など）です。

6. インストーラで「ディスクの場所」ダイアログ・ボックスが表示される場合は、次のようにディスク・マウント・ポイント・ディレクトリのパスを入力します。

- 自動的にマウントされる場合

```
/cdrom/cdrom0
```

- 手動でマウントする場合

```
/cdrom
```

操作を続けるには、次の該当する項に進んでください。

- 4-3 ページ「[Oracle Database 10g Products のインストール](#)」
- 4-4 ページ「[既存の Oracle ホームへの Oracle HTML DB のインストール](#)」
- 4-6 ページ「[新規の Oracle ホームへの Oracle Database 10g Companion Products のインストール](#)」

Tru64 UNIX でのディスクのマウント

ディスクをマウントする手順は、次のとおりです。

1. ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
```

2. 必要の場合は、次のようなコマンドを入力し、現在マウントされているディスクをアンマウントしてドライブから取り出します。

```
# /usr/sbin/umount /cdrom
```

この例では、/cdrom はディスク・ドライブのマウント・ポイント・ディレクトリです。

3. 適切なディスクをディスク・ドライブに挿入し、次のようなコマンドを入力してマウントします。

```
# /usr/sbin/mount -t cdfs -o nodefperm,noversion /dev/disk/cdrom0c /cdrom
```

この例で、/cdrom はディスク・マウント・ポイント・ディレクトリです（必須）。
/dev/disk/cdrom0c はディスク・デバイス名です。

4. インストーラで「ディスクの場所」ダイアログ・ボックスが表示される場合は、次のようにディスク・マウント・ポイント・ディレクトリのパスを入力します。

```
/cdrom
```

操作を続けるには、次の該当する項に進んでください。

- 4-3 ページ [「Oracle Database 10g Products のインストール」](#)
- 4-4 ページ [「既存の Oracle ホームへの Oracle HTML DB のインストール」](#)
- 4-6 ページ [「新規の Oracle ホームへの Oracle Database 10g Companion Products のインストール」](#)

トラブルシューティング

この付録では、トラブルシューティングについて説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- 要件の確認
- X Window の表示エラー
- インストール・エラーが発生した場合の操作
- インストール・セッションのログの確認
- Configuration Assistant のトラブルシューティング
- インストール失敗後のクリーン・アップ
- HTML DB イメージ・ディレクトリの別名

要件の確認

この付録に示すトラブルシューティング手順を実行する前に、システムが要件を満たしているかどうかと、第2章「既存の Oracle ホームにインストールする前の作業」または第3章「新規の Oracle ホームにインストールする前の作業」に示したインストール前の作業をすべて完了しているかどうかを確認してください。

X Window の表示エラー

インストーラをリモート・システム上で実行しており、インストーラのユーザー・インタフェースをローカル・システム上で表示すると、次のようなエラー・メッセージが表示される場合があります。

```
"Failed to connect to server"
"Connection refused by server"
"Can't open display"
```

これらのエラー・メッセージの1つが表示された場合は、次の手順を実行してください。

注意： この手順が該当するのは、UNIX ワークステーションのユーザーのみです。X サーバー・ソフトウェアがインストールされた PC またはその他のシステムを使用している場合は、リモート・システムの X アプリケーションをローカル・システム上で表示する方法について、X サーバーのマニュアルを参照してください。

1. ローカル端末ウィンドウで、X Window セッションを開始したユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
$ xhost +
```

3. 次のコマンドを入力します。workstation_name はワークステーションのホスト名または IP アドレスです。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合

```
$ DISPLAY=workstation_name:0.0
$ export DISPLAY
```

- C シェルの場合

```
% setenv DISPLAY workstation_name:0.0
```

4. X Window アプリケーションがローカル・システム上で正しく表示されるかどうかを判断するには、次のコマンドを入力します。

```
$ xclock
```

モニターに xclock が表示されます。

5. xclock が表示される場合は、xclock を終了してインストーラを再起動します。

インストール・エラーが発生した場合の操作

インストール中にエラーが発生した場合は、次のように操作してください。

- インストーラを終了しないでください。
- インストール画面の 1 つに間違った情報を入力して「次へ」をクリックした場合は、「戻る」をクリックして元の画面に戻り、情報を訂正します。
- インストーラでのファイルのコピーまたはリンク中にエラーが発生した場合は、B-4 ページの「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。
- Configuration Assistant の実行中にエラーが発生した場合は、B-5 ページの「[Configuration Assistant のトラブルシューティング](#)」を参照してください。
- 問題を解決できない場合は、B-6 ページの「[インストール失敗後のクリーン・アップ](#)」の手順に従って、失敗したインストールの内容を削除します。

インストール・セッションのログの確認

インストール中には、インストーラにより実行されるすべてのアクションがログ・ファイルに記録されます。インストール中にエラーが発生した場合は、問題の原因と考えられる情報をログ・ファイルで確認してください。

ログ・ファイルを表示する手順は、次のとおりです。

1. 必要場合は、次の該当するコマンドを入力して oraInventory ディレクトリの位置を判別します。

- AIX、Linux x86 または Linux Itanium の場合

```
$ cat /etc/oraInst.loc
```

- 他のオペレーティング・システムの場合

```
$ cat /var/opt/oracle/oraInst.loc
```

oraInventory ディレクトリの位置は、このファイルの `inventory_loc` パラメータに指定されています。

2. 次のコマンドを入力して、インストーラのログ・ファイル・ディレクトリに移動します。 `orainventory_location` は oraInventory ディレクトリの位置です。

```
$ cd /orainventory_location/logs
```

3. 次のコマンドを入力して、ログ・ファイル名を判別します。

```
$ ls -ltr
```

このコマンドによりファイル・リストが作成順に表示され、最新のファイルが最後に表示されます。インストーラのログ・ファイル名は次のような名前です。 `date_time` はインストールの開始日時を示します。

```
installActionsdate_time.log
```

4. ログ・ファイル内で、エラーに関する情報があると思われる最新項目を表示するには、次のようなコマンドを入力します。

```
$ tail -50 installActionsdate_time.log | more
```

このコマンドでは、ログ・ファイルの最後の 50 行が表示されます。

5. インストーラにより表示されるエラーまたはログ・ファイルにリストされるエラーが再リンクの問題を示している場合は、次のファイルで詳細を確認してください。

```
$ORACLE_HOME/install/make.log
```

Configuration Assistant のトラブルシューティング

Configuration Assistant の実行中に発生したインストール・エラーのトラブルシューティング方法は、次のとおりです。

- B-4 ページの「[インストール・セッションのログの確認](#)」に示したインストール・ログ・ファイルを確認します。
- `$ORACLE_HOME/cfgtoollogs` ディレクトリにある特定の Configuration Assistant のログ・ファイルを確認します。エラーの原因となった問題を修正します。
- 「Fatal Error. Reinstall」というメッセージが表示された場合は、ログ・ファイルを確認してその問題の原因を調べます。手順の詳細は、「[致命的エラー](#)」を参照してください。

Configuration Assistant の障害

Oracle Configuration Assistant 障害は、インストール画面の最下部に表示されます。追加情報がある場合は、Configuration Assistant インタフェースに表示されます。Configuration Assistant の実行ステータスは、次のファイルに格納されます。

```
oraInventory_location/logs/installActionsdate_time.log
```

次の表に、実行ステータス・コードを示します。

致命的エラー

Configuration Assistant の実行中に致命的エラーを受け取った場合は、次の手順で現行のインストールを削除し、Oracle ソフトウェアを再インストールする必要があります。

1. B-6 ページの「[インストール失敗後のクリーン・アップ](#)」の説明に従って、失敗したインストールの内容を削除します。
2. 致命的エラーの原因を修正します。
3. Oracle ソフトウェアを再インストールします。

インストール失敗後のクリーン・アップ

インストールが失敗した場合は、インストール中に作成されたファイルを削除し、Oracle ホーム・ディレクトリを削除する必要があります。ファイルを削除する手順は、次のとおりです。

1. 4-3 ページの「[Oracle Database 10g Products のインストール](#)」の説明に従ってインストーラを起動します。
2. 「ようこそ」ウィンドウで「**製品の削除**」をクリックするか、インストーラのいずれかのウィンドウで「**インストール済の製品**」をクリックします。
「インベントリ」ウィンドウが表示され、インストールされている製品の一覧が表示されます。
3. 削除する製品を選択して「**削除**」をクリックします。
4. 失敗したインストールで作成された Oracle ホーム・ディレクトリを手動で削除します。
5. Oracle ソフトウェアを再インストールします。

HTML DB イメージ・ディレクトリの別名

Oracle HTML DB Configuration Assistant は、Oracle HTML DB イメージ・ディレクトリの別名 `/i/` を定義します。別名 `/i/` がすでに定義されている場合、Oracle HTTP Server は別名 `/i/` の最初の定義を使用します。Oracle HTML DB イメージが適切に表示されない場合は、次のいずれかを実行します。

- 可能な場合は、`/i/` の最初のインスタンスを他の別名に変更します。
- または、`$ORACLE_HOME/marvel/images` ディレクトリから、最初の別名 `/i/` で定義されたディレクトリにイメージをコピーします。

数字

64-bit

システム・アーキテクチャのチェック, 3-6

A

AIX

APAR のダウンロード場所, 3-9

oinstall グループの作成, 3-26

oracle ユーザーの作成, 3-28

oraInst.loc ファイルの位置, 3-26

oratab ファイルの位置, 3-32

システム・アーキテクチャのチェック, 3-6

ソフトウェア要件の確認, 3-8

バージョンの確認, 3-8

パッチ要件, 3-8

パッチ要件の確認, 3-9

メンテナンス・レベルの確認, 3-8

APAR

AIX での要件, 3-8

ダウンロード場所, 3-9

チェック, 3-9

Authorized Problem Analysis Report

「APAR」を参照

B

.bash_profile ファイル, 3-35

Bash シェル、デフォルトのユーザー起動ファイル,
3-35

Bourne シェル、デフォルトのユーザー起動ファイル,
3-35

C

CD-ROM

AIX でのマウント, A-2

HP-UX でのマウント, A-3

Linux でのマウント, A-4

Solaris でのマウント, A-5

Tru64 UNIX でのマウント, A-6

chmod コマンド, 3-34

chown コマンド, 3-34

Configuration Assistant

トラブルシューティング, B-5

C シェル、デフォルトのユーザー起動ファイル, 3-35

D

Database Configuration Assistant

トラブルシューティング, B-5

DISPLAY 環境変数

設定, 3-34, 3-35

dupatch コマンド, 3-25

DVD-ROM

AIX でのマウント, A-2

HP-UX でのマウント, A-3

Linux でのマウント, A-4

Solaris でのマウント, A-5

Tru64 UNIX でのマウント, A-6

E

env コマンド, 3-37

/etc/oraInst.loc ファイル, B-4

G

getconf コマンド, 3-6
groupadd コマンド, 3-27

H

HP 9000 システム
 HP-UX オペレーティング・システム要件, 3-9
HP-UX
 HP 9000 システムの要件, 3-9
 Itanium システムでの要件, 3-9
 oinstall グループの作成, 3-26
 oracle ユーザーの作成, 3-28
 oraInst.loc ファイルの位置, 3-26
 oratab ファイルの位置, 3-32
 Quality Pack のダウンロード場所, 3-11
 Quality Pack 要件, 3-10
 Quality Pack 要件の確認, 3-11
 システム・アーキテクチャのチェック, 3-6
 バージョンの確認, 3-9
 パッチのダウンロード場所, 3-12
 パッチ要件, 3-10
 パッチ要件の確認, 3-11
 必要な X ライブラリ・シンボリック・リンクの
 作成, 3-12
HTML DB
 データベース・オブジェクトの削除, 6-3
HTTP Server, 3-4
 一時ディスク領域要件, 3-4
 スワップ領域要件, 3-4
 ハードウェア要件, 3-4
 物理 RAM 要件, 3-4
 メモリー要件, 3-4
httpd.conf ファイル、移行, 5-3

I

instfix コマンド, 3-9
isainfo コマンド, 3-6
Itanium
 HP-UX オペレーティング・システム要件, 3-9

J

JAccelerator, 1-7
JDK
 Solaris で必要なフォント・パッケージ, 3-19
 Tru64 UNIX 要件, 3-23
JPublisher
 Oracle SQLJ Runtime, 1-5
 Oracle SQLJ Translator, 1-5
 概要, 1-4

K

Korn シェル、デフォルトのユーザー起動ファイル,
 3-35

L

Legato Single Server Version
 インストール後の作業, 5-16
 概要, 1-6
Linux
 oinstall グループの作成, 3-26
 oracle ユーザーの作成, 3-28
 oraInst.loc ファイルの位置, 3-26
 oratab ファイルの位置, 3-32
 カーネル・エラータ, 3-18
 システム・アーキテクチャのチェック, 3-6
 ソフトウェア要件, 3-13
 ソフトウェア要件の確認, 3-18
 ディストリビューションの確認, 3-18
 バージョンの確認, 3-18
.login ファイル, 3-35
lslpp コマンド, 3-8

M

mkdir コマンド, 3-34

N

Net Configuration Assistant
 トラブルシューティング, B-5
Network Information Services
 「NIS」を参照
NIS
 ローカル・ユーザーおよびグループの代替, 3-25

O

OFA

Oracle インベントリ・ディレクトリの推奨パス, 3-31

Oracle ベース・ディレクトリに関する推奨事項, 3-30

Oracle ベース・ディレクトリの推奨パス, 3-30

Oracle ホーム・ディレクトリの推奨パス, 3-31

oinstall グループ

有無の確認, 3-26

作成, 3-26

説明, 3-25

Optimal Flexible Architecture

「OFA」を参照

Oracle Database

ORACLE_SID 環境変数の設定, 3-34

Oracle Database Examples

概要, 1-4

Oracle Database 製品のインストール前の作業, 2-2

Oracle HTML DB

インストール後の作業, 5-14

Oracle HTTP Server の再起動, 5-15

インストールの検証, 5-15

インストール先, 1-10

インストール前の作業

Oracle Database インストールのチェック, 2-4, 3-37

Oracle XML DB のチェック, 2-4, 3-37

ディスク領域要件のチェック, 2-3

概要, 1-10

データベース・オブジェクトの削除, 6-3

Oracle HTTP Server

移行, 5-2

以前のリリースとの比較, 1-9

インストール後の作業, 5-2

インストール先, 1-10

概要, 1-8

Oracle *interMedia* Image Accelerator, 1-7

Oracle Text のナレッジ・ベース

概要, 1-7

Oracle XML DB, 2-4, 3-37

ORACLE_BASE 環境変数, 3-30, 3-34

シェル起動ファイルからの削除, 3-35

設定, 3-34

ORACLE_HOME 環境変数

シェル起動ファイルからの削除, 3-35

設定されていない, 3-36

ORACLE_SID 環境変数

シェル起動ファイルからの削除, 3-35

設定, 3-34

Oracle インベントリ

説明, 3-31

ポインタ・ファイル, 3-26

Oracle インベントリ・グループ

有無の確認, 3-26

作成, 3-26

説明, 3-25

Oracle インベントリ・ディレクトリ

推奨パス, 3-31

説明, 3-31

Oracle ソフトウェア所有者ユーザー

Oracle ベース・ディレクトリとの関係, 3-30

環境の構成, 3-34

作成, 3-27

説明, 3-25

デフォルト・シェルの判別, 3-34

必要なグループ・メンバーシップ, 3-25

Oracle ベース・ディレクトリ

ORACLE_BASE 環境変数, 3-30

Oracle ソフトウェア所有者ユーザーとの関係, 3-30

Windows での等価ディレクトリ, 3-30

既存の識別, 3-32

作成, 3-34

新規の作成, 3-33

推奨パス, 3-30

説明, 3-30

適切なファイル・システムの識別, 3-33

マウント・ポイント, 3-30

要件, 3-30

例, 3-30

Oracle ホーム・ディレクトリ

Oracle ベース・ディレクトリの識別に使用, 3-32

推奨パス, 3-31

説明, 3-31

要件, 3-31

Oracle ホーム名, 3-31

oracle ユーザー

- Oracle ベース・ディレクトリとの関係, 3-30
- 環境の構成, 3-34
- 作成, 3-27
- 説明, 3-25
- デフォルト・シェルの判別, 3-34
- 必要なグループ・メンバーシップ, 3-25

oraInst.loc ファイル, 3-32

- 位置, 3-26

oraInventory ディレクトリ

- 「Oracle インベントリ・ディレクトリ」を参照

oratab ファイル

- 位置, 3-32
- フォーマット, 3-33

oslevel コマンド, 3-8

P

passwd コマンド, 3-28, 3-29

patchadd コマンド, 3-22

PC X サーバー

- インストール元, 3-4

pkginfo コマンド, 3-20

.profile ファイル, 3-35

Program Technical Fixes

- 「PTF」を参照

PTF

- AIX での要件, 3-8

Q

Quality Pack

- HP-UX での要件, 3-10
- HP-UX での要件の確認, 3-11
- HP-UX 用のダウンロード場所, 3-11

R

Red Hat

- オペレーティング・システム要件, 3-13, 3-15, 3-17

Red Hat Package Manager

- 「RPM」を参照

root.sh スクリプト、バックアップ作成, 5-2

RPM

- Linux での確認, 3-18

rpm コマンド, 3-18

S

setld コマンド, 3-24

SHELL 環境変数

- 値の確認, 3-34

SID

- ORACLE_SID 環境変数の設定, 3-34

sizer コマンド, 3-23

smit コマンド, 3-26, 3-28

Solaris

- Java 用フォント・パッケージ, 3-19

- oinstall グループの作成, 3-26

- oracle ユーザーの作成, 3-28

- oraInst.loc ファイルの位置, 3-26

- oratab ファイルの位置, 3-32

- オペレーティング・システム要件, 3-19

- システム・アーキテクチャのチェック, 3-6

- ソフトウェア要件, 3-19

- ソフトウェア要件の確認, 3-20

- バージョンの確認, 3-20

- パッケージ要件, 3-19

- パッチのダウンロード場所, 3-22

- パッチ要件, 3-20

- パッチ要件の確認, 3-22

Solaris の Java フォント・パッケージ要件, 3-19

SUSE

- オペレーティング・システム要件, 3-13, 3-15, 3-17

swlist コマンド, 3-11

T

TEMP 環境変数, 3-5

- 設定, 3-36

TMPDIR 環境変数, 3-5

- 設定, 3-36

/tmp ディレクトリ

- 領域の解放, 3-5

- 領域のチェック, 3-5

TNS_ADMIN 環境変数

- 設定されていない, 3-36

Tru64 UNIX

- oinstall グループの作成, 3-26

- oracle ユーザーの作成, 3-28

- oraInst.loc ファイルの位置, 3-26

- oratab ファイルの位置, 3-32

- サブセット要件, 3-23

システム・アーキテクチャのチェック, 3-6
ソフトウェア要件, 3-23
ソフトウェア要件の確認, 3-23
バージョンの確認, 3-23
パッチのダウンロード場所, 3-25
パッチ要件, 3-24

U

umask, 3-37
umask コマンド, 3-34, 3-37
uname コマンド, 3-9, 3-20
UNIX グループ
 NIS の使用, 3-25
 oinstall, 3-25
 oinstall グループの有無の確認, 3-26
 oinstall グループの作成, 3-26
 oracle ユーザーに必要, 3-25
 要件, 3-25
UNIX コマンド, 3-37
 chmod, 3-34
 chown, 3-34
 dupatch, 3-25
 env, 3-37
 getconf, 3-6
 groupadd, 3-27
 instfix, 3-9
 isainfo, 3-6
 lslpp, 3-8
 mkdir, 3-34
 oslevel, 3-8
 passwd, 3-28, 3-29
 patchadd, 3-22
 pkginfo, 3-20
 rpm, 3-18
 setld, 3-24
 sizer, 3-23
 smit, 3-26, 3-28
 swap, 3-5
 swapon, 3-5
 swlist, 3-11
 umask, 3-34
 uname, 3-9, 3-20
 unset, 3-36
 unsetenv, 3-36
 useradd, 3-28
 xterm, 3-4

UNIX ユーザー
 NIS の使用, 3-25
 oracle, 3-25
 oracle ユーザーの作成, 3-27
 要件, 3-25
unsetenv コマンド, 3-36
unset コマンド, 3-36
useradd コマンド, 3-28

V

/var/opt/oracle/orainst.loc ファイル
 ログ・ファイルの確認, B-4

W

Windows
 Oracle ベース・ディレクトリに関する類似点, 3-30

X

X Window
 表示エラー, B-2
X Window System
 リモート・ホストの有効化, 3-4
xterm コマンド, 3-4
X エミュレータ
 インストール元, 3-4
X ライブラリ・シンボリック・リンク
 HP-UX で必要, 3-12

あ

アーキテクチャ、システム・アーキテクチャの
 チェック, 3-6
アクセス権
 Oracle ベース・ディレクトリ, 3-34

い

一時ディスク領域
 解放, 3-5
 チェック, 3-5
一時ディレクトリ, 3-5
インスタンス
 インスタンス識別子 (SID), 3-34

インストール

- CD-ROM、マウント, A-1
- インストール・タイプ, 1-2
- エラー, B-4, B-5
- 概要, 1-2
- ログ・ファイル, B-3

インストール後の作業, 5-1

- Legato Single Server Version, 5-16
- Oracle HTML DB, 5-14
- Oracle HTTP Server, 5-2

インストール・タイプ, 1-2

- Oracle Database 10g Companion Products, 1-2
- Oracle Database 製品, 1-2
 - JPublisher, 1-4
 - Legato Single Server Version, 1-6
 - Oracle Database Examples, 1-4
 - Oracle Text のナレッジ・ベース, 1-7
 - ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ, 1-7
- Oracle Database 中間層製品
 - Oracle HTML DB, 1-10
 - Oracle HTTP Server, 1-8

インストール前の作業

- Oracle Database 製品, 2-2
 - Oracle Database 10g インストールのチェック, 2-2
 - Oracle Database 10g の Oracle ホーム・ディレクトリの識別, 2-2
- Oracle Database 中間層製品, 2-3
- Oracle HTTP Server インストールの識別, 2-3

え

エミュレータ

- X エミュレータからのインストール, 3-4

エラー

- Configuration Assistant, B-5
- X Window, B-2
- インストール, B-4, B-5

エラータ

- Linux カーネル・エラータ, 3-18

お

オペレーティング・システム

- AIX のバージョンの確認, 3-8
- HP-UX のバージョンの確認, 3-9

Linux でのディストリビューションとバージョンの確認, 3-18

Solaris のバージョンの確認, 3-20

Tru64 UNIX のバージョンの確認, 3-23

オペレーティング・システム要件

- Linux, 3-13
- Solaris, 3-19
- Tru64 UNIX, 3-23

か

カーネル

- Linux エラータ, 3-18

環境

- oracle ユーザー用の構成, 3-34
- 設定の確認, 3-37

環境変数

- DISPLAY, 3-34, 3-35
- ORACLE_BASE, 3-30, 3-34
- ORACLE_HOME, 3-34, 3-36
- ORACLE_SID, 3-34
- PATH, 3-34
- SHELL, 3-34
- TEMP と TMPDIR, 3-5, 3-36
- TNS_ADMIN, 3-36
- シェル起動ファイルからの削除, 3-35

き

起動ファイル

- シェル, 3-35

く

グループ

- oinstall グループの有無の確認, 3-26
- oinstall グループの作成, 3-26

さ

サブセット

- Tru64 UNIX での確認, 3-24
- Tru64 UNIX での要件, 3-23

し

シェル

- oracle ユーザーのデフォルト・シェルの判別, 3-34
- シェル起動ファイル
 - 環境変数の削除, 3-35
 - 編集, 3-35
- システム・アーキテクチャ、チェック, 3-6
- シンボリック・リンク
 - HP-UX で必要な X ライブラリ・リンク, 3-12

そ

ソフトウェア要件

- AIX での確認, 3-8
- Linux, 3-13
- Linux での確認, 3-18
- Solaris, 3-19
- Solaris での確認, 3-20
- Tru64 UNIX, 3-23
- Tru64 UNIX での確認, 3-23

ち

- 致命的エラー, B-5

て

ディスク領域

- Oracle Database 製品のチェック, 2-2

ディレクトリ

- Oracle インベントリ・ディレクトリ, 3-31
- Oracle ベース・ディレクトリ, 3-30
- Oracle ホーム・ディレクトリ, 3-31
- oraInventory, 3-31

データベース・オブジェクト

- Oracle HTML DB の削除, 6-3

- デフォルトのファイル・モード作成マスク設定, 3-34

と

- トラブルシューティング, B-1
- 致命的エラー, B-5

ね

ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ

- JAccelerator, 1-7
- Oracle *interMedia* Image Accelerator, 1-7
- 概要, 1-7

は

パッケージ

- Linux での確認, 3-18
- Solaris での確認, 3-20
- Solaris での要件, 3-19

パッチ

- AIX での確認, 3-9
- AIX での要件, 3-8
- AIX 用のダウンロード場所, 3-9
- HP-UX での確認, 3-11
- HP-UX での要件, 3-10
- HP-UX 用のダウンロード場所, 3-12
- Solaris での確認, 3-22
- Solaris での要件, 3-20
- Solaris 用のダウンロード場所, 3-22
- Tru64 UNIX での要件, 3-24
- Tru64 UNIX 用のダウンロード場所, 3-25

ふ

ファイル

- .bash_profile, 3-35
- /etc/oraInst.loc, B-4
- .login, 3-35
- oraInst.loc, 3-26, 3-32
- oratab, 3-32
- .profile, 3-35
- /var/opt/oracle/oraInst.loc, B-4
- シェル起動ファイルの編集, 3-35

ファイル・システム

- Oracle ベース・ディレクトリに適切な, 3-33

ファイルセット

- AIX での確認, 3-8

ファイル・モード作成マスク

- 設定, 3-34

プラットフォーム

- アーキテクチャ・サポートのチェック, 3-6

プロセッサ

- システム・アーキテクチャのチェック, 3-6

へ

ベース・ディレクトリ
「Oracle ベース・ディレクトリ」を参照

ほ

ホーム・ディレクトリ
「Oracle ホーム・ディレクトリ」を参照

ま

マウント・ポイント
Oracle ベース・ディレクトリ, 3-30
マスク
デフォルトのファイル・モード作成マスクの設定,
3-34

め

メンテナンス・レベル
AIX での確認, 3-8

も

モード
デフォルトのファイル・モード作成マスクの設定,
3-34

ゆ

ユーザー
Oracle ソフトウェア所有者ユーザー (oracle), 3-25
oracle ユーザーの作成, 3-27

よ

要件
HTTP Server, 3-4

れ

例
Oracle ベース・ディレクトリ, 3-30

ろ

ログ・ファイル, B-3
トラブルシューティング, B-4